始

基督の徒の思想

富永德麿

大正
4. 8. 4
内交

基督の徒の思想

序言

私は説教を考へるとき、又は信仰にかゝはる文章を草するとき、いつも聽く人または讀む人の靈を思ひ、また其の事情を思ひ、どうか何所にも用く神の靈が、其所に注ぎかゝつて、凡ての要求を充たし、神の心の全く行はれるやうにと、切に願つて已まないのである。私は唯だ此心を以て講壇に立ち、又筆を執る。此の小冊子の文章も斯くして出來たものである。

此はもと雜誌『基督の徒』の上に、信仰修養の助のために載せた文章で、其の第一號より第十二號まで、即ち大正二年九月より同三年八月までの分を集め、緒言一篇を添へ、少しの訂正を施したものである。

之を小冊子として出版するに至つたのは、此等の文章の一つづゝ雜誌に出たとき、既見未見の友人にして深き靈の同情を表し、奬勵を與ふるもの少からず、近頃は所々より出版を勸むる人も多いので、自分でも其氣になつたからである。

私は唯だ人の益になるやうにと思ふて書いたのであるから、文章の方にも、誰にでも分るやうにと氣をつけた積りである。雜誌の友人には信者未信者とも學問上の友達もあるが、齡の高い老人もあり、まだ女學校に在る少女もある。

私は其等の人々の顏を想ひつゝ筆を運ばせた。もし此心が通して、あらゆる種類の人に讀まれ、其の精神に幾分の助とならば、幸の至りである。

私共の奉じて居る基督敎は、誰にでも入り、誰にでも用を作し、誰をも幸にするもの、其の人を救ふものであると信じて居る。正統派とか福音主義とかいふ方の人々も、又自由派といふ方の人々も、事實に於て共に此の基督敎に同感を表して來られるのは、私の最も感謝して居る所である。私はそこに私共

の基督敎の特色を見出だし、其の力を信じ、それで苦戰もして居るのである。信者の人にしてもし讀むで基督敎の新しい中心を見出だし、新しい力を發揮せられるやうな人があらば、私の祈は聽かれたのである。

書中所々に時季に關した一句二句が這入て居る。其はクリスマスとか新年とか復活節とかに當つての說敎であるが、故と原文のまゝ出して置いた。

大正四年六月下旬

著者誌

325-367

基督の徒の思想

目次

緒言……一
神の人格の中心……二〇
神の前の一人……四三
神に委せよ……六四
神に依る經驗……九一
人間根本の救……一一七
救は天より……一四五
生活の目標……一七五

代理の苦勞……二〇五
死を要す……二三〇
靈魂の新裝……二五七
靈と戰爭……二八四
常世の春…(世を去りし靈を懷ふ)……三〇四

基督の徒の思想

緒言

一

基督の徒とは如何なるものであるか、耶蘇基督を信じて之と同じ心となり、同じ心を以て思想し、同じ心を以て行ひ、己れの生きて居ること、動いて居ることは、即ち基督が其所で生きて居り動いて居るのであるといはれ得るもの、即ち是である。

基督の徒といふ者は單に基督教會に加はつて居たり、傳道して居たり、基督教の理屈を知て居たりするばかりの者ではない。いくら教會に加はつて居たか

らとて、基督と同じ心となり、基督の靈が其人の心を支配し、其人の行を行はせて居るのでなければ、其は異教徒である。傳道をして居るとて其が何も眞の基督の徒たる手形にはならぬ。口ばかりで基督教を說くのならば、どんな者にでも出來るのである。或は基督教の理屈に明るくても、頭ばかりで分つて居て心に基督の精神が這入て居らず、其の人物が基督の靈で出來て居ないならば、此れ又基督の徒ではない。基督の徒は耶蘇基督と一體になつて居るのである。基督は御自分と弟子等の間柄を葡萄の幹と枝とに譬へ玉ふた。使徒パウロは之を首と肢體とに譬へた。實に基督の徒と基督とは生きて居て切ても切られぬ關係のものとなつて居るのである。枝は幹から切り離されぬ。肢體は首から取り去られぬ。もしさうしたら枯れる死ぬるのである。枝は幹に連り、肢體は首に繫がり居てこそ全いのである。連り繫がつて居れば、一の生命が通ふて居る。枝の尖までも、葉の端までも、通ふて居るのは幹と同じ生命で、枝や葉は其の

生命の現はれて形となつたものである。

基督の徒は其の精神が基督を信じて基督に連つて居る。基督の徒が基督を仰いで、之を慕ひ、之に事へ居る間に、基督の心は基督の徒の靈の中に這入て、段々其中に充つる。段々基督の物を思ふやうに思ひ出し、基督の事を行ふやうに行ひ出す。即ち基督の心が彼等の身に由て用いて現はれて行くので、彼等の動くは基督の動くことゝなるのである。此れが基督と同心一體となつたといふ意味で、幹の生命が枝葉に通ひ、幹の中に充つる生命が用いて現はれて枝葉となり花を咲かせ實を結ばせると同じなのである。基督の徒とは斯ういふ者を指した名である。

二

斯く基督の徒は耶蘇基督と心の一體となつて居るものであるが、其の耶蘇

基督は如何なる者であるか。基督の人格は如何に見ても神の子である。即ち神そのまゝの人物である。基督の近き弟子たりし人々は、我等その榮を見るに眞に神の生み玉へる獨子の榮にして惠と眞實にて充てりと言ひ、又は夫れ凡て神の圓滿は基督に於て形を成せりと言て居る。凡ての弟子等は彼を神の子と崇め、之を神と同等に主と呼むだ。彼等は基督に直接に交つて、其の人物の大いなるに驚き、其の德の美はしきこと世に匹なきに仰天し、又其の感化の力無限にして、自分等の靈の中に洪水の堤を決する如く溢れこむで來たのに膽を潰したのである。そこでどうしても此は主である、神の子であると確信せざるを得なかつたのである。

我等が聖書を讀むで見ても、成程弟子等が斯く感じ斯く信じたのは無理はないと思はれる。聖書の中の三福音書に由りて基督の言たこと行たこと又其の人物全體を見ても、或は聖書の他の部分を讀むで、基督が聖書の其等の部分の

著者等に及ぼして居る感化を見ても、耶蘇基督の人物は實に二つなく大きく二つなく高く二つなく美はしい。其の德は確に神そのまゝとの外は思はれぬ。たとひ今日如何樣に思想の高い者があり、如何樣に想像に富むだ者があり、如何樣に小說を作ることの巧い者があつても、とても聖書の中に書き現はされて居る耶蘇のやうな人物を書き出すことは出來ない。もし出來さうだつたら試みて見るがよろしい。直ちに其の無駄骨折なるを見出だすは明である。否基督自身の一代記を書いて見ても、今日の大學者大思想家が、聖書の中の耶蘇一代記ほどのものをどうしても書き切れぬのである。ストラウスや、ルナンなどいふ人たちのやうな、信仰のない一代記は尙更のこと、シーリーの一代記でも物足りないし、信仰の篤い人々の書いたものでも尙聖書を讀むほど鮮に耶蘇の人物を示して居らぬ。されば二千年前の弟子等が有りもせぬ耶蘇の德を書き立てた所で到底祿なものは出來る筈はなかつたのであるのに、聖書の基督一代記

が、斯くも立派な人物を鮮に書き顯はして居るのは、實際耶蘇の德が高くして、其の時代の人々の目に入り耳に入り心を動かしたからである。弟子等は耶蘇基督に直接に交はり、基督の感化に由て心を高く引き擧げられ、其の高く擧つた心で以て自分等の見たり聞たりするまゝ耶蘇の言行を傳へたのである。

耶蘇の一代記に由て耶蘇を見ると、彼は品性に於て圓滿なる神の子であつた。我等が自分の心を張り立て、足の先で爪立するやうにして、出來る限りの高いことを思ひ、神の德はこんなものだらうと想像して見るが可い。其の自分の想像した神の德を基督の實際有て居た德と比べて見るならば、ちやんと基督の靈の中には、そんなものは圓滿に具はつて居る、否々其よりは更に〳〵ずつと高い德が、限りなく基督の內に具はつて居る。我等もそこで昔の弟子等と同じく、基督を神の子と崇め、又斯くの如く神を其のまゝに現はし、神の子の姿を全く具へたものは、唯だ一人しが見當らぬのであるから、之を神の獨子と崇

めざるを得ぬのである。

其の神の子の德は如何なるものであるか。神と父子の關係を十分に保つて、全く一心同體である所が其である。父と子とは二人であつて一心である。一方の心は直ちに他方の心に通ずる。別に六かしい敎をしたり、詮義立てをしたりすることは何もいらぬ。一方が善とすることは他方も善とする。他方が惡とすることは一方も惡とする。父の心が動いて何かしやうとすれば子の心も同時に動いて其をする。父の心に人を愛する心が起れば子の心にも其が起る。父の心に起つた愛の心を子が實行する。父は隱れて休むで居ても子は父の心を間違ひなく行ふ故、父の心は行はれて居る。父子の關係はこんなもので、基督と神との關係は實に之と同じであつた。否此の至り極まつたものであつた。基督は神と一心同體であつた。基督の品性は神の獨子であつた。

そこで基督は先づ神を愛し神の心に從ひ神の心を行つた。基督には神を仰ぐ

ことが樂みであつた。神に從ひ神の心を行ふことが無限の喜びであつた。約翰傳には父の心に遵ひ其の業を成し畢るこれ我が食物なりと言たと記してある。神の心を行つて居れば自分の生命が續くと思ふた心が顯はされて居る。彼の一生は一點私を求めた所がなく唯だ夫れ神の心を成さうとしたものである。其故神の心なりと信じた所には、何所にも彼は勇往邁進した。何事をも彼は斷行した。如何に自分には厭なこと辛いことであらうが、如何に困難なことであらうが、彼は唯だ天父の心を成すに熱中して、其を冒して行たのである。最後には十字架に出くはした。天父の心を行ひ、人を救ふて神の子供としやうとすれば敵は己れの生命を取ることが明なのである。けれども彼は天父の心をなさねばならぬ。人を立派なる神の子とし、其の諸〳〵の不幸と禍を取り去てやらねばならぬ。其がために殺されるならば十字架も神の心である。彼は斯う信じて尙進むだ。案の如く最も悲慘な最後を遂げた。彼の弟子等はこゝを以て

基督は死に至るまで天父に從ひ、十字架の死をさへ受くるに至れりと言て居る。

其故基督の精神には神と相許し相信ずる心が充ちて居て、神との間水も洩らさぬ樣であつた。神は基督を愛した。基督は神に賴つた。神は基督に依て用いた。基督は神に身をも心をも委せた。故に基督には信仰の念が磐石の如く確かである。彼は全く安心して平和であり淸淨であつた。如何なる誘惑も彼の心を墮すことが出來なかつた。四十日四十夜惡魔から猛烈な誘惑を受けたけれど、基督は全く之に打ち勝て、天の使の群から萬歲を唱へられたことを經驗して居る。彼の弟子は基督は我等の如く誘はれたれど罪を犯さずと言て居る。基督はまた色々の苦みにも遭た。脅にもあつた。危險にも臨むだ。悲いことにも出くはした。然し彼の心の平和は一點其等のために攪き亂さるゝことがなかつた。肉慾も、患難も、迫害も、恥辱も、劍も、十字架も、死も、彼の心の淸き樣を汚し、其の平和を破ることは出來なかつたのである。

それから基督は全く愛の心を以て生き又死んだ。彼は神と一つ心となつたものであるから、神の心で人を見た。人は皆な神の子供である、人の靈の中には神の靈の血が流れて居る、其を呼び醒まし、引き立てるならば、大いに發展して大人格となる、非常に美くしく高いものとなる、さうすれば今生も未來も幸ひが極りない、基督自身と同じく、神を父と呼び、神と一心同體となつて、清き心充ち、平和充ち、喜び充ち、愛充つるに至るといふことを見給ふた。其故彼は人が現在は心の誤つて居るため、神に背を向けて慾を果たし惡念を實行するため、千萬の罪と禍とを生じ、不幸此上もなく、未來も永遠に幸を受ける望みのないのを感じ、神の心を以て之を哀み、人の心を動かして、之を罪の方から神の方に向け、神の子の靈に挽き回し、其の限りなき幸を受けさせやうとした。彼は此の天地大の志を以て人に接した。人を敎へた。人を薫陶した。

其ばかりでなく彼は優しき婦人の如く家々の內事に立ち入り、人々の身上にたづさはり、凡ての苦を濟ひ、悲を慰め、禍を幸にせんとした。彼は人の靈魂を神の子供にしやうために敎を說いて四方を歷巡りつゝ、町に入り野に往き、人の居る所に必ず存在する不幸に出あふ每に、其の力の限り之を取り去てやることをつとめた。聖書には病をいやし、癩病を淸め、盲者を見させ、聾者を聞えさせ、跛へを步ませ、死者を甦らせ、貧しき者に福音を聞かせたと記してある。實に彼の一生は人のための一生、彼の一擧手一投足は人を幸にするために動いたものであつた。彼は自ら非常な惱み苦みを見た、極度の敵對に遭つた、終に十字架につけられた。みな人のためであつた。聖書の著者は舊約の句を引て之を說明し、基督は我等の苦を負ひ我等の惱みを荷へり、其の打たれし傷によりて我等いやされたりと記してある。基督の一生は實に愛といふ心が世に生きて用いたものと言ふべきである。

此れが耶蘇基督の一生であり、耶蘇基督の品性であつた。我等は斯ういふ耶蘇基督の事實が世の中に生きて居たことを確に見るのである。

三

基督の徒は斯の基督と同心一體となるものである。基督の敎ふる所も信じやう、其の誡を守りもしやう、然し其ばかりでなく此の基督と靈が一つになつて仕舞ふのが基督の徒である。昔の弟子は世に肉體を以て生きて居た基督に接し、其の足下に跪いて敎を受けた。其の馨咳に接して薫陶を受けた。然し彼等を動かし、彼等を漁師や税吏から立派なる大使徒にした所のものは、決して基督の肉體の力ではなかつた。基督の肉體の奥にあつて肉體を用ゐて居た其の靈であつた。其の神の獨子の人格であつた。基督の人格よりは非常に力の强い德が流れ出て弟子等の心に入た。之を流し入れられて匹夫ペテロ匹夫ヨハネは

神の使徒となつたのである。今日の基督の徒もまた同じである。基督は今や肉體を以て世に在し給はぬ、然し基督の靈は生きて居る。生きて用いて居る。生きて居るからこそ今日尙人を救ふ力が盛にして、今日尙漁夫が大使徒になり、罪人が聖者になり、善人は最も强い大人物になつて居るのである。基督の徒は此の生ける基督と一つに合ふたものである。信仰に由て一體となつたものである。バウロが羅馬書六章五節に用ゐてある字の通り、我等は基督に接芽されるのである。接芽をすると初は臺木と芽とは異つた生命であるが、やがて一になつて仕舞ふ。臺木の生命は芽に通ふ、臺木の生命で芽が延びる、花が咲く、實がなる。基督を信ずる者は、信仰に由て自分の靈が基督の靈に接がれるのである、基督の生命が這入て來て、其の生命で花が咲き實がなり、善き生涯が送られ、美くしき幸福を得られるのである。

既に基督の徒と基督との關係がこんなものであるならば、其の花その實もお

のづから咲かれ結ばるべきは當然のことである。基督と同心一體となつた基督の徒は、また神との關係に於ても基督と一體である。一方には自分の内に安心がある平和がある清き心が充ちて居る。誘惑も墮すことが出來ぬ、患難も迫害も屈することが出來ぬ。死も志を奪ふことが出來ぬ。パウロは基督の徒の此の境を善く言ひ顯はして居る。(神が)豫め定めたる所のものは之を召き、召きたる者は之を義とし、義としたる者は之に榮を賜へり、然れば此等の事に於て何をか言はん、若し神我等を守らば誰か我等に敵せんや、己の子を惜まずして我等凡てのために之を付せる者はなどか之に併て萬物をも我等に賜はざらんや…

…基督の愛より我等を離らせん者は誰ぞや、患難なるか或は困苦か迫害か飢餓か裸裎か危險か刀劍なるか、是れ我等終日汝の爲に死にわたされ屠られんとする羊の如くせらるゝなりと記されたるが如し、然れども我等を愛する者に賴り凡て此等の事に勝ち得て餘あり、そは或は死或は生或は天使或は執政或は有

能者或は今ある者或は後あらん者、或は高きもの、或は深きもの、又他の受造物は我等を我主耶蘇基督によれる神の愛より離らすること能はざる者なるを我は信せりと(羅馬書八ノ三〇—三九)。斯ういふ潔く愛に富み美はしくて强い精神の人格になるのは基督を信ずるものゝ當然のことである。

それで矢張神に對して基督の徒は子として子の道を全うする。凡ての慾を去り、私より離れ、神に事へ、神に從ひ、唯だ神の心に充たされ、神の心を行ふ。基督の生くるが如く生くるのである。

人に對しても基督と一體となつて居る者はまた基督と一體になつて思ひ行ふ。凡ての人の中に神の子供を認め、之を敬ひ之を愛し、之が幸を計り、之が禍を除き、現在の罪と汚れの狀態の中から、どうにかして人を救ふて、其を立派な神の子供の面目に至らせやうと苦心する、祈る、盡力するのである。此の人格を以て家の中に居り、夫に對し、妻に對し、親に對し子に對し、兄弟に

對し姉妹に對する。そこに美はしき家庭又は家族が現出する譯である。此心を以て自分の交はる社會に對する。其社會は段々改まり、幸なやうにならざるを得ぬ。此の生き方を以て國の中に居る。國家は實に面目を一新するに至るのである。

四

基督の徒は基督と一體となつて生きて行く。生きて行く內、動いて行く內に、一々基督が現はれて出る、基督の徒を切れば基督の血が出るやうになるのである。

我等は至て不完全な基督の徒である。我等の內にある基督の姿は歪むで形をなして居らぬであらう。然し其でも心の鏡が不精密なだけ磨きが足りないだけで、映つて居るのは基督の姿である。我等の靈の中は尙濁つて居る、罪

や缺點で充ちて居る。然し唯だ一筋にせよ基督の心が流れ入て居る。曾て基督を信せず、我が靈を基督の靈に接芽しなかつた時には、絕えてなかつた思想が今は出來て居り、志も起つて居る。我等は昔知らなかつた神を知た。昔思はなかつた高きを思ふ。昔有たなかつた愛の心が生じて居る。微だらうが確に在る。即ち昔の己と今の己は別人になつて居る。基督の靈こゝにある。我等は自ら基督の徒だと信ずる。かく思ふて必ずしも神を汚しもせず、基督を辱しめもせぬと思ふ。基督は之を許し給ふて居ると思ふ。パウロは此は神の聖靈が我等の靈に印を押したので、我等は救はれて居る、後には神の與ふる無限の幸を殘りなく受ける證文を持たものだと言た。又聖靈自ら我等の靈と共に我等が神の子たるを證すとも言た。

基督の靈を與へられて、神の子供の赤坊となつた我等は、日々の生活に於て神の子供の經驗をしなくてはなくぬ。仰いでは神に對して子供らしく考へ

行はなくてはならぬ。横には人に對し神の子供らしく振る舞はねばならぬ。我等の日々の生活には種々雜多のことが起つて來、我等は種々雜多の事情の中に居る。之に對してみな神の子供らしく處せねばならぬ。即ち基督の徒として、基督が凡ての今日の人の中事の中境遇の中に生くると同じに生きねばならぬ。

著者も基督を信じて基督の生命を注ぎ入れられた一人である。眞に微である が著者の靈の中には基督の心の碎けし影が宿つて居る。曾て不信仰の時代には無かつた新しい心が實に据つて用いて居て自分は確に別人となつて居る。此は如何にしても搔き消すことが出來ぬ。

著者は凡ての人から此の基督の徒になつてもらひたい。凡ての人に此の基督の徒の祝福をもたせたい。著者生涯の志は唯だ其である。著者の凡ての努力の目的はみな其である。そこで其の志を持て講壇にも立つ。其の目的を抱いて筆も執る。斯くして現はれたもの丶一部が此書である。敢てをこがましくも

基督の徒の思想と題したが、著者は自ら基督の徒として思ふ所、又様々の事情の中にある人々になり代り、基督の徒として其の事情の中で思ふ所を述べた積りである。著者は其等の人々の顏を心の眼に眺めつ丶思想したのである。

神の人格の中心

一

物には何でも中心と云ふものがある。其物全體の眞中に當る所である。圓い物にも角い物にも歪むだ物にも皆な中心がある。我等の身體にも中心がある。形の方の中心もあり、重さの方の中心もある。形の方の中心と重さの方の中心と甘く調はぬと自然首を傾けたり、一方の肩を上げたり、又は足を扛げたりする樣になつて居る。人の人格にも中心がある。人が其れ〳〵其の人と爲を異にして居るのは此の中心の在所が異ふ所から來たものである。此の中心を本にして、凡て其の人の人格が築き上げられて居り、此の中心を源として、凡て其の人の精神の活動が出て行く。それで人々の精神のあらはれて出た末の行や

言は、此の中心に近いほど力が強く、いよ〳〵此の中心になると非常な勢を持て居る。譬へば僅かに鷄卵ほどもない大いさの凸面玻璃の表面に射して居る日光でも、其の燒點に持て行くと紙なり木なり燒けるやうに、人の精神も其の中心は燃えて居る。そこで此の中心から出て來る事は萬事力が強い。茲から出て來ない事だと甚だ弱い。例へば意志の極めて堅い人格の人が、其の意志を張り立てゝ事をするといふ場合には、何物も其の前を塞ぐことは出來ない。又非常に知力の優れて居る人が、其の知力を勵まして物の道理を考ふるといふ時には、如何に亂麻の如くもつれて居る難問でも、忽ちさら〳〵と解けて仕舞ふのである。所が若しも誤つて知力が優れて居る質であるのに、意志を最も強く働かさなければならない所に置かれるならば、其人は自分の精神の中心の方を用ゐず、其の端の方を用ゐて働くのであるから、爲す所はどうも甘く行かない。之に反して意志の強くして他の方はさほど整ふて居ない人が、感情家のするや

うなことをしても矢張駄目である。人間の遇不遇は是から起つて來るので。非常に偉い才を抱いて居ても其をば働かされず、却て不得手な所を使つて行かなければならぬやうな所に居ては、其人は終に埋れ木となつて仕舞ふ。それで人はさういふ不得手な所に居るとどうかしてもつと得手な所に出やう〳〵とする。自分では覺らなくても若い者などは常に自分の人格の中心を働かすることの出來る所に落ち着くまでは、何時も安らかでなく、始終何かを追ひ求めて居るやうな有樣である。

斯く精神には中心があるが、此の天地に充つる大精神、神の精神の中心は何所に在であらうか。神の人格にも中心がなくてはならぬ。然し神は無限の大精神であつて、其の活動は千樣萬態當ならず。其の中心を知ることは却々六かしい。そこで古より人類は此の中心を探しあぐむだ。多くはあらぬ方へ探して行て、之を探しあてた積りで間違つたことを考へ、神の精神の中心と思ふ所に

訴へて神と親しき間柄とならうと企てたり、又神の精神の中心と思ふ所を奉じて、其を自分の生活に行ひ、世の中に適用やうとした。けれども其は間違つて居たのであるから、無論直ちに差支を生じたのである。例へば猶太教の如きは、基督教の出でざる前は最も優れたる宗教であり、今日でも基督教を除いては矢張猶太教が一番よいと思はれるが、其が神の精神の中心を取り違へて居たのである。猶太教では神は唯だ聖い正しい一方の精神だと信じた。そこで此の中心に訴へて神に喜ばれやうとした。儀式を嚴重に守り、律法を端々までも行ひ、其で救はれやうとした。又毎日の生活にも此の信仰を適用して、僞善となり、罪人や稅吏をば一點の假借もなく責め懲らした。異邦人をも割禮のない犬として卑しめた。然し其は成程或る場合までは差支なく行はれたか知らぬが、決して長く通らない宗教であつた。儀式や律法はさう〳〵一點一劃も落なくは守れない。守れた所で矢張滿足はない。終には肉を笞つて血を出すまでになつても

矢張滿足がない。然かのみならず異邦人などをさう何時までも卑しめては居られない。斯うなつて來ると、先の猶太教の考へた所は神の精神の中心ではないに違ひない。何となれば天地は皆な神の造り玉へる所、神の精神から造られ、神の主義に由て造られて居る。皆な神の中心から傘の骨のやうに出て來て居る。其故神の精神の中心を捕へて、其の主義で世の中に立つて行くならば、何時まで立ても、何所に行ても、差し閊へる筈はない。然るに其が直ちに差し支へるといふのは、是は神の精神の中心の主義でないからであることは明である。こんな主義では世界は救はれない。唯だ一部は救はれるか知らぬが、全體は左樣いかない。斯ういふ風のもので、多くの宗教があつても、世界が救はれないといふのは、其は神の精神の中心を取り違へて居るからである。神の精神の中心は何所に在るであらうか。

二

基督は神は天の父だと教へ玉ふた。神の精神の中心は清くして熱き愛なるを感じたのである。求めよさらば與へられ、尋ねよさらば會ひ、門を叩けよさらば開かるゝことを得ん、そは凡て求むる者は得、尋ぬる者は會ひ、門を叩く者は開かるべければなり、汝等の中誰か其子麵麭を求めんに石を與へんや、また魚を求めんに蛇を與へんや、されば汝等惡しき者ながら善賜を汝等の子に與ふるを知る、まして天に在す汝等の父は求むる者に善物を與へざらんやと言はれ（馬太傳七ノ七ヨリ十一）、汝等の頭の毛皆な數へらると言はれ（馬太傳十ノ三十）、其外神をば何時も慈愛の溢るゝ天の父と教へ、御自分でも神に對する實際の態度が、如何なる場合にも父に對する態度で、基督は神に對しては、神の中心の愛に訴へ、又御自分の此世に於ける生活は、神の中心の愛から直接に泉を引た行であつた。

實に基督に由て神は天父であり、愛を中心として居ることが、我等に明白確實になつたのである。

神の中心が愛であるから、神が人を救ふ途も明に之れから出て居る。神は人を救ふのに他の途を以てせずして、唯だ愛の途を以てせられた。天地を造つた力を以てすれば、神は人を罪の狀態から挽き回すに如何なる手段をも取ることが出來たであらう。或はノアの時にしたといふ傳說のやうに、洪水を全世界に氾濫させて、人間の種を絕やして、之を造り更へることも出來たであらう。基督の時代の人々は、救主は天から雲に乘つて來て、非常な恐ろしい力を顯はし、怨敵を滅ぼして仕舞つてイスラエル人を救ふと信じて居た。神は左樣いふ方法を取らば取れない事もなかつたであらう。然しながら神は他の途を取られた。神は人類を心から愛する。人類を表面から嚇しつけ叩きつけずして、其の靈の中に入り行き、其所を溫め、其所を次第に感化して、內の方から裏から變

つたものにした。即ち基督をば猶太人の想像して居たやうな恐ろしい大將として遣さずして、却つて以賽亞書五十三章に在るエホバの苦む僕のやうな姿を持たものとして、此世に遣はし玉ふた。言ひ換へれば神は猶太のマカバヨス家の者や、乃至羅馬のカイザルの中に活動き、彼等の權力に由て人民を救はうとせずして、ナザレの大工の子耶蘇の中に活き、茲に御自分の比もなく高き正義の德を溢らせ、愛を動かせて、此の神そのまゝなる人格によつて世界の人の心を動かし、之を罪より引き出だして天國に移し、永生を有するものとなし玉ふた。マカバヨスの救ふた猶太は唯だ政治の上に暫くの獨立を得たばかりで、其の有名無實の獨立も百十年二十年餘りで亡びて仕舞つて、全く跡もなくなつた。然し耶蘇に愛せられた者は、或はペテロのやうに、或はヨハネのやうに、もと極めて朦かつた心も開けて天父の顏を鮮かに見るやうになり、もと冷であつた心も熱して他人を愛して之がために身を棄つることを惜まないやうになつ

た。全く靈が一變して非常な高い者となり、美くしき生命の花の咲き亂れた者となつた。是が救である。此の救は神が耶蘇の人格の中で生きて活動き弟子等を愛して、耶蘇が自ら十字架にかゝるをも厭はなかつたから來たことで、全く愛の力である。人類を救ふに斯ういふ愛の途を取るのは、神が愛だからである。思ふに神は此の以外の途をば執ることが出來なかつたのであらう。自分の心に滿足せず、又決して長く力ある途でないと思ふことを、神が行はれる筈もなかつたであらう。そして此の愛の救が實に力があることは、神の精神の中心が愛だからである。若し精神の中心から出ない事ならば、其ほど力はない。然し精神の中心から出る事なら、其人のする事の中で最も力があり、其の人の存する限りは續くものである。愛の救が最も力があつて、如何に罪に沈んで居るものをも引き上げ、如何に閉ざして居る心をも開かすることが出來、如何なる場合にも差支へがなく、何所に行きても通用せぬ所なく、而して永久につゞき、

神と共に行はれるところを見ると、此の救の途は、即ち神の精神の中心から出たものであることが分り、神の精神の中心は愛で燃えて、如何なるものをも熔かさんとして居ることが分るのである。

それから又神の精神の中心が愛であるから、我等人間が愛を行ふときには、之が最も力があり、之が何時何所にも差支ないのである。昔から人間は世の中で正しく生きて行くには如何したら可いかといふ事を尋ねた。色々な道も考へ出された。然し基督は唯だ人を愛せよと敎へられた。又自分で人を愛した。我等が此の愛の主義で行くときには、一軒の家の中は非常に美はしくなる。其所は春よりも樂しい。又一つの國の中には、或は階級などはあつてもなくても、どんな風に社會の組み立てが出來て居ても、平和と喜びとが充ちて居る。世界に此の愛が行はれるならば、世界は一つの家となつて仕舞ふ。此愛は敵に對して行つても差支がない。敵をば憎まなければならないから、茲ばかりは愛が通

用しないやうに見えるが、其所にも愛を持て行くと、敵は無くなつて仕舞ふ。愛の向ふ所には決して敵はない。愛は常勝將軍である。世の中に愛の行はれぬ所、愛の用をせぬ時はない。パウロは之を見て言た。愛は永久に墮つることなし。然れど預言は廢り方言は息み知識も亦廢らん（哥林多前書十三ノ八）。人の愛が斯程までに力があるのは、是は人間の精神から出るものであるばかりでなく、天地の大精神たる神の中心が愛だからである。此の中心と合致して居るから、愛の行が非常に力あつて、天地續く限り活動をなし、所として時として行はれぬことがないのである。

神の精神の中心が愛であつて、我等を取り扱ふには其の愛で取り扱つて居玉ふ。之を思へば眞に感謝と慰と奬みとに堪へない。基督は玆を見て實に力ある天父の敎をなしたのである。確に神が愛を以て我等に對するなら、其は此世の關係に比へれば親子の關係である。

三

そこで我等も神に對しては父に對する態度を取り、第一には其の愛に訴へなくてはならぬ。基督の精神は人をして神の愛に訴へて生きさせることである。人間が父に訴へる時は唯だ信じ賴り其の慈愛に身を委すのである。神に對するまた其でなくてはならない。基督の敎が福音すなはち喜びの音づれである所の一は玆に在る。猶太敎では人間が自分の意志を張り詰め、律法の一點一劃をも洩らすまいとして骨を折る。其所には唯だ骨折が無限であつて、而して我れ眞に律法を完く守り果せたりといふ自覺はない。此は重荷であつて、靈は其下で疲れよろめいて居る。其他の宗敎でも多くは是である。所が基督は一切そんな事を問はない。そんな事は全く問題外である。神に對するには外の所は見なくとも宜しい、唯だ其の中心の愛を見て、其所に訴へよ。神の我等を愛する愛に

感激して、我等神を愛し神を信じ神に委せよといふのである。つまり小さな我を棄てゝ、神を一心に仰ぎ、神に靈を投げかけて仕舞へといふのである。是ほど容易い宗教はあるまい。猶太人でも希臘人でも、祭司でも税吏でも、是は出來ることである。之が出來れば其で十分だといはるれば、こんな喜ばしい音づれはあるものでない。

基督は曾て嬰兒を抱いて、天國に居る者は斯くの如きものだと言た。是は色色の方面から意味が考へられるが、根本の意味は嬰兒のやうに極めて單純な心の者でなくてはならないといふことゝ思はれる。嬰兒は自ら弱い我儘なものであるが、然も其さへ意識せず、唯だ父母ある故に安んじて居る。彼は父母なくしては如何なる金殿玉樓でも、如何なる大群衆の中でも滿足せず、父母と偕ならば、獄でも死でも喜んで這入つて行くのである。單純な嬰兒は唯だ父母に頼つて生きて居る。人の神に對する確に是でなくてはならぬ。凡ての事は神が心

配してくれる。自分獨りで引き受けて幾ら心配した所が何ともなるものでない。誰かよく思ひ煩ひて汝等の身長を寸分も延べ得んや。人は唯だ一日分の苦勞を一日々々して行き、人事を盡して天命を待つべきである。我等の罪のことも餘り心配しては可けない。其は天父に對する態度でない。人は罪を犯すといふと非常にくやしがる。自分を罵る、鞭つ。其も一面はよい、然し其ばかりでは益がない。自分の靈は自分で拵へた傷を眺めて、涙をはふり落し、いつまでも傷口を弄つて居るよりも、全く心の底から之を悔い、もう二度と斯かる罪をば犯すまじと磐石の決心を固めて、仰いで父の神に向ひ、其の精神の中心たる愛、其の父たる所に訴へて赦を乞ふべきである。是れは神を天父と信ずる信仰の現彰で、人の正當の態度である。基督は之を明に敎へ、又示し玉ふた。是が基督敎の尊い所で、我等は此の眞理に由て、不信仰の生活を棄て、新らしき人となるのである。

然し基督の宗教は無責任な他力本願とはちがふ。神は生きて居るのである。生きたる天の父を信ずるのである。神の靈の内には生命が充ち愛が盛に活動き正しい德が輝いて居る。それで神を信じ、我等の心を開いて神を愛し、神に打ち委する時には、神の愛の心、義の德は、急雨の樣に我等の靈の中に流れ入て、我等の靈の中を其で一杯に充たすのである。人間同志の間でも心と心と通ひ合ふ。一人の德の高い人があると、直ちに其の德は見えない内に他の人の靈の中に這入つて行て、其を同じやうな義人と化する。是は著しい事。まして天地絶大の神である。愛と義との極まれる神である。我等の小さい我を棄て、心を開いて此神に向ふのであるから、神の德は我等の靈の中に瀧のやうに流れかゝり、我等を神の子とせずには已まない。それで我等は唯だ神を念ひ、神に向つて心を開く、それで十分なのである。

人は神に對しては確に此れだけすれば可いではないか。此外に何の爲すべき

ことがあるか。却つて此外に色々なことをすれば、あまり靈の人造品が出來て、甚だ不自然で、神の心の成就を妨げるやうになる。あまり修養とか鍛練とかいふことを言ふ者が、どうも變に枉りくねつて居たり、行き止まつて發達しなかつたりするのは此故である。我等は此の宏大なる天地に於て子である。之を思ふて神の愛にのみ賴るべきである。

四

それから第二に、神が我等の父であつて、神の精神の中心が愛であるから、我等は此の中心から出たことを此の天地間に在て行はなくてはならぬ。此の中心から出た事を行ふならば、天地間何時何所でも通せぬことはなく、又非常に力があつて、神ある限り、即ち永遠に活動をするのである。我等が人を愛して動くならば、其は決して我等の一人、この五尺の身の中心から出た行ではな

く、實に此の天地の大精神たる神の只中に根ざし、其所より動き出た所の行である。之には向ふ所敵がない。我等は愛を神の精神の中心から引き出して、之を八方十方に引き行き、世の中に隅々まで之を活きて働かさねばならない。我等が此の世界で爲すべきことは唯だ愛のみである。

私は子供や兄弟の事を心配して、何所か然るべき人物の家庭に置いて、十分善き感化を與へてもらひたいと言ふ人のある毎に、其はいけません、世の中には固より其等の子弟を敎育してくれるほど立派な人物が無い事はありますまいが、然し親や兄弟ほど眞に愛を以て子弟を取り扱ふ者はない、自分の傍に置て、心の底より左樣いふ者を愛し、其の靈のために熱心に神に祈んなさい、其の誠は何かにつけて必ず迸り出る、然すれば如何なる靈と雖も動かないことはない。神は必ず其の祈に應顯あらしめると答へるのである。私は愛の力を信ずる。決して口で矢釜しく敎訓したり、七面倒な規則で搦めたりする事

は何もいらない、眞に其の人のために祈つて居るなら、其人は必ず神に從ふやうになる。眞に其人を愛するならば、其の愛は何かで動いて出て、對手の心を動かさずには居らぬ。必ず立派な人物になるのである。私の忠告を受けて左樣いふ方針を取り、思ふて居た人を立派に救ふて見違へる樣な人物とした人もあるのは實に感謝に堪へぬ。

萬事が左樣いふものである。或敎會の人が來て言ふのに、私は同僚を信者にしたいと思ふが、然し其の過などをつけづけ言た所で仕樣もないから、此からは成るべく親切にし、病氣の時には見舞ひ、窮した時には助け、其で基督信者といふは親切なものだなと覺らせて、神の榮を顯はし、段々其人たちを導たいと思ふて居ると言た。成程面白い考に相違ない。然し私は答へて、人に親切にするならいつそもう傳道といふ心を取り去て、唯だ親切にしてやつて下さいと言た。私の考へでは人に基督敎の善いのを見せるため、所謂神の

榮を顯はすために親切をするのでは價がない。人の不幸や病を見て同情に堪へず、其を宥めたいために親切をする。其でこそ愛の活動である。さうしたなら其が却つて神の榮を顯はし、人を導くやうになる。基督は病を癒し、癩病を清め、盲を見さするなど、種々親切をされたが、其は決して神の力を顯はすため、自分を信ぜさするためではなかつた。唯だ人を愛するためであつた。だから癒された者が如何な態度を取るか、其を餘り心に留めず、其を條件にして親切をしなかつた。十人の癩病人を清めてやつた時にも、歸つて來て禮を言た者は一人あつたのみである。それで我等も唯だ人を愛しさへすれば善いのである。此の愛があれば人は救へるのである。若し我等が人を神に導きたいと思ふならば、愛して其の人のために心から祈つて居ることが大切。之を忘れず、始終この心掛で居るならば、其の思ふ的の人は必らず遠からず救はれるのである。

其人が又言ふのには、然らば自分に害でも加へる人がある時には、神に向つ

て、どうか人を赦す心を與へ給へ、彼を愛する心を與へ給へと祈るのでありますかと問ふた。私はそんなことは要るまいと思ふた。そんなことを祈るよりも、もつと直接に、神よ彼の人を救ひ給へ、彼の人を幸福ならせ給へと祈るべきであらう。かう祈る時に一點其の人を惡む心があらうか。有ても其は消えて仕舞ふ。此の心で居たら如何なる敵をも立派な者にすることが出來る。

教會の事でも矢張さうである。或教會の人が曰ふには、教會の傳道に一向功の擧がらないのは、唯だ教會を盛にしやう、献金を多くしやうといふやうな心から傳道するためだ。もつと人の靈を思ふて、之を救はうといふ心からしなくてはならないと。確に左樣であらう。其心で傳道したなら教會は生命で溢れ、救はるゝ者は桝で計らなければならないやうになるであらう。私は此の夏も海岸に行て居たが、一朝海岸を歩いて居ると、漁師等が舟を海に押し卸して居る。然し其の朝は波が大分高いので容易に卸されない。すると數艘の舟の

漁師どもは十數人が一緒になつて、一艘づゝ卸しては、一人が其を漕いで沖に出で、かくて五艘を卸してしまつて、最後の舟に殘りの者ども乘て出で、沖で各自の舟に乘り分れて出て行た。私は之を見て美はしいものだなと感じた。其から直ちにガリラヤ湖の古を思ひ出した。ペテロの兄弟とヤコブの兄弟とが、互に助け合つたのもこんなものであつたらう。して見ると此の中に矢張ペテロが居り、ヤコブ、ヨハネが居るのであらう。彼等は基督に遭はないため、其の人格の花が開かずして埋沒して仕舞ふ、あゝ私は彼等を見ること基督がガリラヤの漁師を見る如くあるであらうかと。斯う思ふて我が愛の足らぬことを恥ぢた。確にペテロ、ヨハネと云ても、ガリラヤ湖で漁をして居た時には矢張匹夫であつたのである。子供の時には朝かち晩まで水に這入つて、寒くなれば濱邊の燒砂を脊に盛り上げて温まり、また海に飛びこんで行て、體は眞黑に目ばかり光つて居たに違ひない。其を基督は愛した。愛して彼等を弟子に招

いた。彼等は基督に接するや、其の靈が忽ち眠より醒めたる如くなつて、其の內に在つた淸く高いものを發揮し、終に大使徒となつたのである。傳道でも決して口先のことではない。唯だ愛の事である。愛さへあらば傳道は出來る。片田舍の傳道者にも此の心あつたなら決して傳道難の嘆を發せずにすむのである。田舍に居て若し物の分つた人が一人も居ないならば、物の分らない人を心から愛して、其の救はれるために祈つて居て見るが可い。半年たゝない內に必ず其人を救ふことが出來、物の分つた人にすることが出來る。

斯ういふ風に神の中心から愛を引て、之を何所にも持て行て活動かせたいものである。家の中に活動かせるなら其の家は光で充ちて來る。友人の間に活動かせるなら其の友垣は花よりも美くしくなる。學校にせよ役所にせよ此が通せぬ所はない。之に因て輝くやうにならぬ所はない。基督は仰せられた、我れ汝等に告げん、汝等の敵を愛し、汝等を咀ふ者を祝し、汝等を惡む者を善視し、

虐遇迫害する者のために祈禱せよ、斯くするは天に在す汝等の父の子とならんためなり、夫れ天の父は其日を善者にも惡者にも照らし雨を義者にも不義者にも降らせ給へり……是故に天に在す汝等の父の完きが如く汝等も完かるべし。（馬太傳五ノ四三以下）。神の精神の中心は愛である。我等は之を感謝し、其の恩に感激し、我等の人格の中心をも愛として、全く神と一つに合ひ、此の世界を救ふことを努めたいものである。實際の生活は此の主義で行けるのであり、行かなければならぬ

神の前の一人

一

凡ての物は一つ〳〵別々のものであるが、又その種類の中の一つである。例へば庭にある松の樹は、是は一本立のものであつて、天下唯だ一つしか無いものであるが、然し松といふ種類の樹の中の一つである。故に物は一つ〳〵の物として見ることも出來れば、種類といふものを見ることも出來る。種類は一つ一つの物の集つた名のやうで、一寸考へると別に深い意味も無い樣であるが、實は甚だ尊いものである。此の天地自然の有樣を見ると、天然の世界は種類といふものには甚だ親切であるが、一つ〳〵の物に對しては甚だ冷かである。一つ〳〵の物は極めて頻繁に生滅して居る。蜉蝣は朝出來て夕を待たずに死で仕

舞ひ、夏蟬は秋が來ると亡びて仕舞ふと言て居る。人の生命、草の花、互に果敢なきを譬へ譬へられて居る。斯く一つ〳〵の物は現はれて直に消えて居るのに、種類と云ふものは何時までも亡びない。蜉蝣も種の絶えることなく、蟬も幾千萬年の夏を噪がして居る。人類は水の流の如く、匹夫も英雄も一切平等に、幽冥界に繰りこまれて居るに拘はらず、人類といふものは綿々として絶えない。唯だ其のみならず、凡て種類といふものは益々榮えて行くことが多い。一つ一つの物は眞に生きづらく、段々弱くなつて衰へて行くものがあつても、其の種類といふものは其がため却つて強くなつて蔓つて行くのである。人間の如きは一人々々を調べたら或は弱くなつて行て居るかも知れない。或る學者等は人間は次第に弱くなつて來たから、終には亡びて仕舞ふと言て居るが、然し事實を見ると、一方には金持の子供など身體の弱い者が多く出來、又他の一方に職工など悲慘な者が多くなつて衰へて行て居るに拘はらず、人間全體はいよ〳〵開けて、ます〳〵榮えて行て居る。之を以て見ると種類といふものは幸福を受けて居るが、一つ〳〵の物は呪はれて居るやうである。

生きた物には生存の競爭といふことがある。其を見ると此の感じは一層強くなる心地がする。生存の競爭といふのは、例へば何かの蟲が或る所に卵を產みつけた。數萬の子が一時に孵化したとする。其だけの者の食ふべき物はない。日光なども下の方になつて居るものには屆かない。さうなつて來ると數萬の中で或は都合よい所で孵化したもの、或は力の強い者ばかりが、食物も得られ、日光にも照らされるので、育つて親蟲とまでなるが、運の惡い奴、弱い奴は皆な死で仕舞はなければならない。此の天然の世界には、こんな風で生れて空しく死で居る生命が莫大な數に上つて居るのである。人間にも生存競爭がある。世が進むで行くと其が益々激しくなる。もう今日でも、我國で若し小作人や勞働者の家に生れやう者なら、生涯埋れ木の花さく春には逢はぬのである。否子孫

末代までも浮ぶ瀬は無い。身體も弱く生れて、其を十分に養ふことも出來ず、矢張夭死もしなければならぬ。子供も多くは生れぬ。生れても育たぬ。そこで子孫も割合に殖え方が少く、外の人種から壓し倒されて仕舞ふ。斯ういふ風にして一人が生きて行くのは眞につらい。然り、唯だ一人の生命を全うすることさへ最早大變の重荷である。其に人類の方はどん〳〵殖えて行て、壯になつて居る。隨分算盤の合はない事のやうだが事實である。人間も全體は天然から親切に可愛がられて居るが、一人々々は眞に殘酷に繼子扱ひにされて居るやうに見える節がある。

之を思ふと世の中は厭になつて仕舞ふであらう。確に之を感じて太く悲むだ學者も少くない。ショーペンハウエルといふ哲學者も、天然は種類には惠み深くして、個性即ち一つ〳〵には辛いと言て、其の厭世主義を說いた。我等も今の世の中に生きては、斯ういふ感じを持ちたくなることもある。何もかも大仕

掛の今日、玉も石も混淆である。十把一からげである。どんな才があつたからとて、其が所を得て働くなどといふことは、先づ六かしい。どんな德があつたからとて、其が世の中に勢を得て人を動かすなどいふことは、殆ど有り得ぬことになつて居る。昔、猶太の預言者などは、猶太の國が一般の人民の罪のために滅びて、其が國民一同の禍となり、惡い者が苦むだのみならず、善人も共に坐にせられて、非常な難儀を嘗めたことを不思議に思つたが、其も一人種であつたからのことで、今の世界は種類のために一人々々は忘られて、泣かうが嘆かうが聞く者はない。世の勢といふ者は、世界よりも大いなる怪物の如く、人類の上に壓しかゝつて、一人々々の泣き號ぶ口に手を當てゝ、どしどし其の仕たい事をやつてのけて居るのである。人間の一人といふものは、下敷にばかりになつて仕舞つた。埋もつて頭の尖も見えなくなつて仕舞つた。

二

然らば我等も世を果敢なむで、厭世世義になつて仕舞ふべきであるか。決して左様でない。前のは一面からの見方である。天然の側からの見方である。物は見所に由て容子が異ふ。若し誤つた見方をして、そんな物だと思ふて取り扱つたら其こそ大變な間違ひを起す。近頃或る大學生の友人が、修業のため田舍から始めて東京に上つて來た。早速東京の名所たる淺草に行て見た所が、種々雜多の興行物で目を眩まし耳を聾にするばかり、數萬の人々は用もなげに集つて上を下へと混雜して居る。青年は之を見て俄に悟り、東京といふ所は皆が遊むで居る所だ、己一人何も勉强するには當らないと、其からは毎日毎日淺草へ通ひつめ、彼是一月あまりも興行物といふ興行物を獵り盡した。所が其がすむで一日何所かの圖書館に入て見た。所が廣い閲覽室は空た椅子のないまで人が

入て居る。皆傍目もふらず讀書して居る。其を見て青年は喫驚仰天し、東京といふ所は皆が勉强して居る所だ、己も一人遊むでは居られないと、其から一生懸命に學問に取り懸つたといふ事である。全く何かの作話を見たやうだが、是は事實ださうである。東京も淺草公園の中に立て見れば、人々が遊むで暮して居る所、圖書館の内で見れば、學問に夢中になつて居る所である。もつと異つた譬を言ふと、軍艦は敵の船から謂ふなら、十四吋砲を八も九も並べて、其をどん〳〵つるべ放つて、此方を微塵に爆裂して仕舞ふ恐ろしい者だが、さて平和の日に其の中に入て見ると、其の軍艦を支配して居る艦長の室などは、華美壯麗、實に心地の善いものである。斯ういふ風に物は立場で容子も意味も變つて仕舞ふ。對手は同じ物でも、此方の見所で異ふのである。人間の一人といふものも若し天然の世界から見るならば、眞に果敢ないもの、哀れなもの、とても生きて居られないものであるが、更に外の方から見所がある。其所から見る

と全く意味も容子も變つて來るのである。

其は霊の世界に立て見ることである。我等の周圍の世界は一面は目に見え手に觸るゝ物の世界である。然し其は表面で其の下に裏がある。此の表面の物の世界を引くりかへして見ると霊の世界がある我等自身が實に霊の世界に居るのである御互の我といふものゝ本尊は何か。頭を抑へて是だとも言へぬ。手を捉へて是だとも言へぬ。我等の我といふ本尊は身體の裏に、目に見えぬ所に在る。唯だ其の目に見えぬ所に在る本尊が、此の身體を用ゐて居る。此の體で物の世界に現はれて居る。此の身體は我等が霊の世界から此の物の世界に覗いた顔である。それで我も人も左樣であるから、世界には御互の身體が集まつて群をして居るばかりでなく、其の裏には我等御互が造つて居る霊の群があることを思はねばならぬ。此の霊の世界は、神と共に造つて居る。何となれば神は大いなる霊だからである。そこで表の方の物の世界から考へると、

眞に重大なことでも、裏の方に廻つて、霊の世界から見ると、殆ど物の數に入らぬものがある。之に反して物の世界では一向目にもとまらない事でも、此の霊の世界の方から見ると、實に大きくして燦爛として輝いて居るものがある。晝間に蒼穹を仰げば、唯だ眩しきのみであるが、深い井の底などに入て見ると、星がきらめいて居るのが分るさうである。此の騒がしくして色々の物が眼の先を去來して居る物の世界から出て、霊の世界に入て見るならば、先には見えなかつたものが見え、凡てが先の容子とは全く異つたものとなつて仕舞ふであらう。古スリアの王がイスラエルの預言者エリシャを執へんとて、馬と車と大軍を遣はして其の邑を取り圍ませた。エリシャの少き僕朝夙に起きて、韜麻竹葦と取り圍むで居る敵軍を見出だし、喫驚してエリシャに向ひ、あゝ我主よ我等如何にすべきやと言た。エリシャは答へて、懼るゝ勿れ我等と共に在る者は、彼等と共に在る者よりも多しと言て、エホバよ願はくば此の少年の眼

を開き給へと祈つた所、僕目を擧げて見わたせば、火の馬、火の戰車が、野にも山にも盈ち〳〵てエリシャの四面に在つたといふ物語がある。確に靈の眼開けて周圍を見るならば、百萬の敵を引き受けても尙懼るゝに足らぬ守護が、自分の四面に盈ちて居ることが分るであらう。ロバート・ブラウニングの詩『アラビアの醫士カルシシュの書翰』の中に　基督から甦らされたラザロに逢た所、物の價がすつかり顚倒して居て、大軍隊の通るも、一匹の騾馬が瓢を負て過ぎると異ることなく、又至て小さい事も、天地を覆へす程に思ふやうになつて居たといふ所がある。萬事左樣いふ風に、靈の世界から物を見ると、物の世界から見たのとは趣もちがひ、輕重大小が顚倒することが多い。

此の靈の世界に立て人間を見ると、人間も初め天然の世界から見たのとは全く異つて見える。茲から見ると、先に物質界で見たとき、物の影に隱れ、一向見えなかつた人間一人の光は、曉の明星よりも鮮かに、四圍を射て居る。

決して埋もれて居ない、消えて居ない。一人一人明かに確實に、永遠の世界を照らし賑はせて居る。靈の世界の中心たり、高御座たる神の懷から見わたすと、人間は一人一人燦爛として天の宮宿に盈ち、此の榮は彼の榮と異つて居ることが見えるのである。綠なる一つ草とぞ春は見し、秋は色々の花にぞありける。桔梗、刈萱、女郎花、皆な異つた色や香を見ることが出來る。耶蘇基督は茲から人間を觀た。ショーペンハウエルや科學者は、天然の方から人間を見た。其の人間は天然の世界の中に埋もり、人の一人一人は人類といふ群の中に消えて仕舞つて、其の中から蚊の鳴くやうな微かな聲で、生きたい〳〵と叫むで、頭を擡げやうと無益に努めて居る者であるが、基督は神の懷の中から人を見た。其の人間は一人一人榮の異つた神の子であつた。

三

人間の一人一人がどれほど尊く意味深いかの證據は、色々の方から見出されやうが、人間一人一人の性格即ち性質の其れ〴〵異つて居るのも其一である。人は一人一人皆な質が異ふ。私の友人に十一人の子供を有た人があるが、時々來て小供の事を話し、十一人が十一人皆な變つて居るといふ。他の友人は六人ある子供の中仲の一人を喪つたが、またなき寶を失つたやうに悲嘆にかきくれ、同じ煙にもといふやうな感じのあることを見受けた。成程單に子供といへば一括にした言葉であるが、親の心には換へ玉のない者で、其の一を失はゞ、他に幾人の子供が居ても、癒されぬ傷が心に出來たのである。然り、人間の一人は天にも地にも二つとないものである。宇宙間の一粒種である。其人が二人ないばかりでなく、其の性質まで其のまゝの者は二人はないのである。人間の一人一人は、活版本ではなくて寫本である。活版本は千篇一律ちやんときまり切て居る。一字拔けて居ると千部萬部皆其所が拔けて居る。所が寫本になると

之と異ふ。一部一部皆人の手で寫した者〜否一點も一劃も皆な人の手で出來たものである。點を打ち棒を引くにも一つ〳〵精神が籠つて居る。時としては書く人の意氣軒昂、字の勢が躍り立つた所もある。人の一人は神の精神をこめて書いたものである。性質の一點一劃も、ちやんと細かな注意が拂はれて在る。屢々神の意氣軒昂し、大いなる英雄や才子を現はして居る。又外の事で譬ふれば一人一人は鍛物を見たやうである。鑄物は一つの型を造つて其に鑄こむので、造作もなく出來るのであるが、鍛物は其と異り、一鎚づゝ打て行く。それで鑄物と鍛物とは形は同じく、一寸見た所では別に變りも無いやうであるが、建築の上に價値が著しく異ふ。ラスキンなどは鑄物を鍛物のやうに誤魔化すなら、非常に建築の美を害するし、鍛物を鑄物と混ずるならば、まるで建築の價がなくなると言て居る。人の一人は鍛物のやうである。神の苦心をこめた鎚の跡が、靈の到る所に見えて居る。人の靈はどう見ても決して型から打し出したもの

とは見えぬのである。

されば一人といふものゝ根は深い。神は一人一人を心を籠め丹精を凝らして造つたのである。一人といふものは神の心の底から造り出されて居る。人の一人は決して此世の表に根もなく湧き出したものではない。海の泡のやうに、唯だ目に見える物の世界の面にばかり出來たものではない。天地の根本たる神の心の唯中から出て居るものである。故に又其の望も大きい。鉢植の木は美事に生ひ立て居る。葉の色もよく枝振も整ふて居る。然し其の生ひ立ちの行く先はもう多寡の見えたもの。何となれば根が限りがある。僅に一杯の土の中から生えて居るのである。けれども大地から萠え出た樫の木は其の生ひ先が分らない。亭々として天を摩する大木となつて尙止まらぬ。人間といふものゝ根は、永遠の世界の神の心の中心に在るのであるから、其の生ひ先も測り難い。スカンデナヴィアの神世物語にあるイグドラジルの樹は、根が一方は天に、一方は霧の

神に、一方は地下に出て、つまり天地に蔓つて居るといつたのであるが、神の中から生え出た人間の靈は、確に此の宇宙六合に枝葉を擴げるべき望を持たものである。

基督が馬太傳十八章の一節以下に敎へ給ふた所は此の心の現はれたものである。斯くの如き一人の嬰兒を受くる者は我を受くるなり、然れど我を信ずる此の小さき者の一人を礙かする者は磨臼を其の頸に懸けられて海の深みに沈められん方なほ益なるべしと言ひ、汝等此の小さき者の一人をも愼みて侮る勿れ、我汝等に告げん、彼等が天の使は天に在りて天にいます我父の面を常に見ればなりと言はれた。基督の眼には小さき一人の幼兒も、實に尊くして一々神の苦心に成る靈であるから一々神の心に留まり、其の愛を鍾められて居るのである。

四

されば我等は第一には自分等の大いなることを思ひ、神に見られて居ることを感じて、大いに慰められ、奬まされねばならぬ。基督は五の雀は二錢にて售るに非すや、然るに神に於ては其の一をも忘れ給はず、汝等の頭の毛また皆數へらると言ひ（路加傳十二ノ六、七）小さき者の一人の亡ぶるは天に在す汝等の父の御心に非ずと言ひ（馬太傳十八ノ十四）一人の罪ある者悔い改めなば神の使の前に喜あるべし、と言はれた（路加傳十五ノ十）。此の淺薄なる世界は非常に忙がしく非常に大仕掛になつて、我等の一人をば忘れて仕舞はうとする。忘れては我等を呑むで仕舞ひ、埋めて仕舞はうとする。器械工場に居て見ると、澤山の大きな車輪が渦のやうに廻つて居て、床も回る、天井も回る、窓から覗いた星も回る、自分自身の生命さへ、靈さへ、一緒に回つて、磨かれ搗かれて製造品となつて行て居る心地がするであらう。何所に自分が在るか、何所に一人が在るか。職工は屢々嘆息するであらう。我身はかくて如何になるのであるか、何の爲めに生れたのであ

るかと。豈夫れ職工のみならんや。今日の世界に生きて居るものは、皆な自分が呑まれて、世界の何所にも頭が見えて居ないのを、何所からか浮び上らうとして、生きたい生きたい、生かせろ生かせろと叫むで居るやうに覺えるのである。然し其は表だ。其は一面だ。裏に回つて見よ。神は在る。汝等の頭の毛みな數へられて居る。聖人君子も此の方に廻つて諸君の一人の尊い事を見た。耶蘇基督は神の懐に在て、神の心の中から、諸君の一人一人を見た。神は分明なる眼を見張り、慈愛の笑を湛へて、諸君を一々見守り、頭の毛をさへ數へて居る。我等は神の此の面を仰いで、大いに奮ひ起たねばならぬ。

次には自ら重んじ望みを持たねばならぬ。我等の人物の根が神の中から出て居るならば、是は大いに發展して宇宙六合に擴がるべきものである。我等の人格の中にはどれほどの物が有るか測られない。ペテロやヨハネやパウロや、皆な一人にして非常なる事をなした。世界は彼等無かつたならば、今とは異つたも

のとなつたであらう。耶蘇基督に至ては、一人にして人類を全く新らしくしたのである。死より生に化へたのである。基督の人格は世界人類の救主となつた。人類全體の生命を買てくれたものとなつた。そこで此の世界を治めしろしめす神の獨子となつた。我等も基督を信じ、基督の如く神を愛し、神を慕ふならば、此の小さい靈も根が神の中に在るのであるから、隨分大きく生ひ立つて、人類の世界を隨分廣く蔭に庇ふことの出來る者となることは疑ひないのである。從つて他人をも敬はなければならぬ。若し親が子を見るに當つて此の心を以てするならば、思ふに其の敎育は誤ることもなく、子供の中から非常に高いもの美はしいものを引き出だして、立派なる人物を作るであらう。夫が妻を斯ういふ風に見るならば、如何に夫婦何れも幸福であり、家庭に美はしい德が充つるか知れないであらう。

第三には人格不滅といふやうなことを確く信ずることが出來る。人格不滅と

は人間の一人一人は此世限りで消えて仕舞ふものでなく、いつまでも靈が存らへて居ることである。若し人間の一人が根のない物で、唯だ此の物の世界、表の世界に泡のやうに生じた者であるならば、人の一人はまた此世限りで無くなるであらう。然し人は神から造られたのである。神の心の眞中から苦心慘憺として、一冊の本を手寫しする如く、正宗が精進潔齋し、二年三年かゝつて一本の刀を鍛ふやうに、彫刻家が血を吐く思ひして、一刀入れては考へ、二刀入れては祈りして、一の像を刻み出すやうに、神は永遠の世界の中から、人の一人を考へ、之を一粒種の尊いものとして此世に造り出したのである。決して之を亡ぼすことは無い。人はウォルヅウォルスの『靈魂不滅の暗示』にあるやうに、永遠の世界の大海から、赤子として此世の一方の岸に上陸し老人として此世の他方の岸から復た永遠の海に入て行くものである。然り海に入たと雖も消えて仕舞つたのではない。

第四に我等は使命を重んせねばならぬ使命といふのは、神より一人一人に命せつかつた事である。神は我等を一人一人苦心して、其れ〴〵異つた者に造つた。我等は一人一人天地間の一粒種であるだけ、其れだけ我等の使命も重いのである。若し自分のすべきことを自分が仕ないならば、天下何人も之を果す人は無いのである。よしや他の人が同じ事をした所で、其は其人が其人の負ふた使命を果たしたまでゝ、自分の所はまだ充たされて居ない。天地間には其だけの空洞が出來て居る譯である。我等は是非茲を充たさねばならぬ。

最後には罪の恐ろしい事又悔改の大慶至極の事を思はねばならぬ。一人の罪も神は照覽して居る。神の目には自分が隱れて居ないだけ罪も隱れて居ない。一人の罪は己れの身を害する。世の中を害する。然し其に止まらない。更に其の波を打ちつゝけて靈の世界に於て神の心を傷くる。否罪を犯しても、事によつたら自分は何も損害を受けないで濟むこともあらう。他人にも何も害を與

へないかも知れない。然し神の眼は分明である。神の靈は何所にも充ちて在る。我が惡い心は毒の刀のやうに神の胸の中を刺し通すであらう。從つて罪を犯したものゝ悔いて改めるといふことは非常なる慶事である。基督は一人の罪ある者悔い改めなば神の使の前に喜びあるべしと言はれた。確に神の其れほど苦心した一つの靈、其の亡びることを神は何よりの憾として居る一つの靈が、罪を悔い、其の心の底より志を振ひ起して、之を再び犯すまじと決心し、神に向ひて翼け上らんとするといふのは、實に大いなる事件であつて天地が形を變へるよりも心に留まることであり、此上もない喜びであらう。されば我等は罪より避けて、神に向ひ、若し犯す所あらば、悔いて心を神に注ぎ其の中に上るべきである。

神に委せよ

一

此の世界には人間の爲せる工がある。是は隨分莫大なものである。人間といふ者が始めて此の世界の上に出來た時と、今日とを比べて見るならば、天地は全く別物のやうである。人類の出來なかつた前には唯だ自然といふものがあつたばかり。其故すべて物の行き途は定り切て居た。日は出でゝまた入り、月は盈ちてまた缺け、花は咲いては散り、水は蒸發してはまた雨となつた。天地を造つた神の眼には何億萬年の後のことまでも明に分つて、眼の前に展げた目錄が一つ一つ行はれて行くやうなものである。

然るに其所に人類が現はれた。其から後は全く趣が變つたのである。人類

は靈の生物として神に造られた。此の靈はもはや自然の物のやうに定り切た途を進むものでない。靈には自由がある。自分で爲やうと思ふことをし、爲まいと思ふことを避ける。右に行かうと思へば右に行き、左へ進まうと思へば左へ進む。それでもう自然の力の上に脫け出て居る。自然の力の上に脫け出て居るから、自分で自分の思ふやうに進むばかりでなく、更に其の上に出て此の世界に自分の工を造り出す。人類は原始から自分で物事を造り出しては造り出して、此の世界に色々の衣裳を被せ、又此の世界を樣々に彫琢して來た。此の世界には人間の工が充ち滿ちて居る。

芝の愛宕山や上野の櫻雲臺から見わたすと、目の及ぶ限りは家また家である。人間は古尾花の末に白雲のかゝると詠まれた武藏野を、斯ういふ風に自分の工で掩ふて仕舞つた。知らぬ山路に分け入つた時にも、或は煙が立ち昇つて居る、或は木を伐る音が聽えて居る、近づいて見れば谷間には幾段の畠が開かれ

てあつて茅屋が二三軒立て居るといふやうなものである。今や此の地球の何所に行ても、人間の工の加はつて居ない所は無いと謂てよろしい。家を建てたり衣を織つたり食物を料理したり、或は村を造つたり國を建てたり會社を起したり、或は習慣といふものを定めたり法律を立てたり、或は文學を著はしたり美術を作つたり、或は哲學を立てたり宗教を奉じたりして、此の世界を人間工で滿たして居る。

曾に左樣いふ表面に現はれた所に人間は自分等の工を行ふて居るのみでなく、人間はもつと隱れた所、裏の方の所、深い所にも盛に工を加へて居る。即ち物の世界の裏にある精神の世界に工をして居る。人間は精神の世界に時々刻刻一事一物みな自分の工を加へて居るのである。我等が自分の靈で自分で選むで善い事をするならば、此の世界の裏を流れて居る精神の流に一杯の美しい善を加へたのである。其だけ善の流は勢が強くなつて人間の社會の根には壓

ふべからざる善の力が潛むで居ることになる。之に反して惡いことをするならば、隱れたる所に湛へて居る惡の流に、更に一層の寄附をなし、其の濁りと恐ろしさとに益々助をしたことになる。

我等は其樣に全體の善とか惡とかいふものに一々工を加へて居るといふばかりでなく、我等は又自分に接する人の靈に向つて、事々物々工を施して居るのである。友人は目に見えぬ所で他の友人の靈に善か惡かの感化を刻みこむで居る。親は勿論何につけ彼につけ子供等の靈に工を加へて、美術家が山から堀り出した大理石に、鑿と槌とを以て自分の思想へて居る所の形を刻みつけるやうに、もとは形の定まらなかつた靈に自分の思想を彫りつけ、之を形の定まつた人物に造り上げつゝあるのである。

また其の上にも人間の工がある。即ち自分の意を以て自分の人物を造り上げることである。我等は自分といふ人物をば親の工で造られもした。產み出して

以來親が苦心を重ねて、あゝなれかし斯うなつてくれよと、心に願を抱きつゝ我等を育てたことは、我等の人物が今持て居る形となるのに餘程力ある工をしたに違ひない。我等は又敎師からも工を加へられた。社會といふものからも、國家といふものからも工を加へられた。然し其の上に自分で自分の人物を彫りもし刻みもし品性といふものを造り上げた。自分には斯ういふ缺點があるから之を去らうと努めて次第に其を無くするのも、又は自分は斯ういふ德を有た人物になりたいと志して、其を具へるに至るのも、みな自分で自分の人物に工を加へることで、左樣して出來上つた人格には、他の力の工に由る所も多いが、然し自分の鑿の跡も鮮に殘つて居るのである。

此等が目に見える所、目に見えない所に施されて居る人間の工であつて、之を見ると世界には人間の工が充ちて居ると謂はざるを得ぬ。

二

斯く人間の工は頗る多いが、然し世界には人間の工より以上のものが更に多いのである。此の大なる宇宙、大なる自然界の事は勿論其ではないか。人間の生じない限りなき前から天地は存在して居つた。人の足のまだ蹈むだことのない野の末にも花は咲き、千尋の海の底にも璧は光つて居る。否我等自身が人間が生うと思つたから生れたのでもない、又は自分で生れやうと思つたから生れたのでもなく、人間の工で死ぬるのでもないのである。生るゝも死ぬるも人間よりも以上の工によるのである。

精神の世界の事でも決して人間の意ばかりに由て運行むでは居らぬ。却て之よりも大なる意に由て動いて居ることを認めずには居られぬ。先づ汎く社會の精神の有樣を見ても其が分る。著しい例を言へば、今から丁度四百年程前にあ

つた宗教改革のやうなものでも其である。其の時の精神の世界は人間の工に由て固まつて仕舞つて居た。千數百年の間、人間は子孫の心に自分等の思想を彫りつけては彫りつけ、其を代々に傳へて行た。人間ばかりが工をするものならば、世の中はもう變りやうもなかつたのである。變つた所が其は多寡の見えたものであつた。然るに其所に一人のルーテルなる人物が現はれて、此の人間の工になつた精神の世界を根本から打ち毀し、茲に世界を新らしくして仕舞つた。ルーテルはもと唯だ一人の若い僧侶であつた。然るにあれだけのことが出來た。其の大いなる變化の源を尋ねて行くと、其は決して當時の世界の人々の間からは出て居らぬ。成程その頃には人々の心は何となく色めいて居た。舊い思想は變つて來て、新しい活きた氣分は世に滿ちて居た。羅馬法王に對する不平も隨分強かつた。然し其の枯草の原のやうになつた世界に一點の火をつける者はなかつたのである。人の心は動きかゝつて居たが何方の方に動くか、どう變るか、

其れはまだ分らず、隨分危かつたのである。然るに一のルーテルから火が出て、世界を新しい宗教で燒て、神に對する人の道を全く新しいものとした。其の火は世の中から取たのではない。實にルーテル其人の胸の中奥深い所に燃え上つた火が元であつた。其の一點の火はどうしてルーテルの胸の奥から燃え出したのであらうか。傳へ說ふ所に由れば、ルーテルは靈のことを思ふて心配に堪へず、羅馬に行て聖ペテロ大會堂の中に在る懺悔の階といふを膝頭を突いて昇つて居た。これは羅馬教會の習はしに從ひ、罪を懺悔する心を表はし、斯うして神から罪を赦されやうとしたのである。所が不圖ルーテルの心には聖書の中の義人は信仰に由りて生くといふ句が電光のやうに閃きこむだ。ルーテルは暫く膝頭で立ち止まり、やがてすつくと立ち上り、默つたまゝ靜に階を降り、其から心が一變し、人は信仰に由て救はれるといふことを唱へ出したといふことである。人間の工は羅馬教會といふ大いなる教會を造り、澤山の儀式だの、

六かしい信仰の箇條だのを造つて居て、ルーテルの心をも其等の人間の工で造り上げて居たが、茲に懺悔の階の上に於て、人間工ならぬ一つの大いなる工はルーテルの心に加はつた。ルーテルの凡ての舊い思想や舊い行き途は、此の工に由て雷に打たれた如く粉微塵に飛び散て仕舞つて、彼は全く新しき人として、新らしき思想をなし、新しき途を行た。此れ實に神の工である。神はルーテルの神を求むる心が清く高く上つて、天にまで達した時に、其所に自らの中より聖なる火を鑽て彼の心に點じ玉ふたのである。今から百七十年程前にジョン、ウエスレーの大いなる活動また實に明なる神の工である。當時の英國の有樣は、不信仰で道德は衰へて居た。ウエスレーは聖潔といふことを獲り求めて居たけれど得られず心中常に不安であつた。然るに千七百三十八年の五月二十四日、朝には聖パウロ大會堂で讃美歌を聞き、夕にはモラヴイア派の集會に行てルーテルの羅馬書註解を聞き、其時俄然として我罪悉く赦されたりといふ確な信仰が胸に湧き溢れて、全く新しい氣持になつたといふのである。斯ういふ奥深い所、また微かな所から出た神の工が、忽ちに猛火のやうになつて、世界に燃えひろがり、世界の精神を新らしくして、低い調子に陷つて居たのを非常に高くし、汚れて居たのを清めて居る。人間の世界は決して人の工ばかりで進むでは居らぬ。人の工が行きつまつたり、人の工が世を甚だしく毀したりして居る時に、神の工が隱れたる所から加はつて、之を救ふて新らしき方角に歩み出させて居る。之がなかつた所はいつでも滅びて居るのである。

然し其ほど大いなる事でなくとも、一人々々の靈の内を見ると、其所には爭ふべからざる神の工が、到底抹すべからざる勢を以て活動いて居ることを認める。惡人が何等自分の功績なくして唯だ神を信ずるといふばかりで、心の底から變つて來て善人になる。前には自分の靈を倒にして見ても、一點微塵その影さへなかつた美くしい思想高い德が、神を信じたといふ唯だ其れだけの心が

けに由て何時の間にか自分の靈の内に出來て居り、もう如何しても拔き去ることが出來なくなつて居る。著しきは大惡人が一變して聖者となつた。斯ういふ明白な事實、然り決して迷ども嘘ども言はれない、目の前で行はれて居る事實は、抑も何に由て起つたのであるか。勿論自分が其を仕出來さうにも自分の中には根からそんな立派なものは無かつた。そんなら何か遠い先祖にでも左樣いふ立派な所があつて、其が何代か飛び超えて自分の中に再び湧き出したのであるかといふに、先祖を調べてもそんな高い思想を持た者は居なかつた。然らば自分の外なる一般の世の中に何所かに左樣いふ高い思想美はしい德が漂ふて居て、其が自分の靈の中に流れ入たのであるか。左樣いふ事は屢々ある。然し又社會に誰も思つて居ない、全く種のない高いものが或人の心の中に湧き出ることがある。其があるから世の中の道德とか宗敎とかいふものが次第に上に進むのである。若し前に在る者が後に出て來るのみであつたならば、永久に人は先

祖より高くなれないのである。然らば其の高い精神が屢々人の心に吹き入れられるのは何に由てゞあるか。自分に非ず、他人に非ずとすれば、これは實に天に在す神のなす所である。然り神は靈なる無限の世界から、其の美はしい靈を人の靈に吹き入れて、人の靈を眠より呼びさまし、塵の中、肉の中、自然の中から、猛然として起て、高きに上らすのである。

耶蘇基督の御一代に至ては、凡てが神の工たること言ふまでもない。其の肉體はマリアの子であつたであらう。然し其の人格は、全く無限なる天の父が、御自分の心によりて、世に現はれしめ、御自分の德を材料として造り上げ玉ふたものに外ならぬ。故に基督の一代の活動は何をなしても皆な神の御工であつたことが表はれて居る。特に人の靈を死だ有樣から活き上らする力ありし所は、其の最も顯はな點とすべきである。

これほど長く說き明さなくとも、天地の間には神の工が充ちて居ることは誰

も認めて信じて居るであらう。實に神は活動いて居る。其の工は強くして物の上にも靈の上にも多くの事を起して居る。

三

神は斯く活きて工をし玉ふて居る。而して其の神の御工は明なる智慧の眼を以て、我等人間に取りて最も幸なる所を見て、之を成就し玉ふことに外ならぬ。神が天地に在さぬならば、我等は左樣いふ惠の攝理が行はれて居ると信ずることは出來ぬが、神在すならば此の天地の下を流れて居る心は愛の心である。

聊でも信仰のある者は、世の中に神の心の行はれた場合、何時其が惠の工でなかつたことを感じたことがあるか。幸も不幸も、喜も悲も、神を信ずる者の上に起つて來る出來事は、みな最後の福を指さして居る。始めて出遭ふた時には、實に耐へ難き惱みで、降り來つた禍と思ふことでも、其の中を通過

して行く內に、其所には非常なる惠の含まれて居て、岩を堀つて金を見出だすやうに、自分の生命に取つて實に價の高いものがあることを見出だすが常である。神の爲し玉ふことに一つも仇はない。私の子供の時に鄕里で聞た俗謠に、親の命と茄子の花は千に一つの仇が無いといふのがあつた。瓜や南瓜などには實とならぬ花が多いが、茄子には其がない、親の言ふことまた其と同じだといふのである。我等は神に對して此の信仰がある。それで基督信徒は終りまで神を天の父だと信ずることが出來るのである。若し神の工に時として徒なこと、又は害になることが出て來たら人は終りまで神を天の父と信ずることは出來ぬ。然るに信仰あるものはどうしても之を失はず、苦しめらるれば苦しめらるゝほど、益々堅く神は父だと信ずる。殺されても信ずる。其は神の工は一々惠だからである。耶蘇基督は其の至れる信仰を有たれた方で、人に棄てられ、辱められ、縛られたけれど、神を父と信じた。終に十字架につけられたけれど、

父よと呼むで息たえた。どんな禍が黒雲のやうに頭の上に蔽ひかゝつても、神の爲し玉ふ所が惠であつたからである。使徒パウロは死も滅亡も害迫も恥辱も天の使も惡魔も自分を基督に由る神の慈より離すことは出來ぬと信じた。彼にはどんな場合どんな事でも、神の自分に爲し玉ふ所はみな惠の工であつたのである。神の工は惠の工である。我等は今はまだ意味の分らぬ出來事に遭ふ。親が死ぬる子が死ぬる、同胞が死ぬる妻が死ぬる夫が死ぬるといふやうなこと、又は其他のことがあつて、今目の前では、其中にどれ程の幸が籠つて居るか分らない事がある。然し何時かは屹度其が見出されると私は何時でも信ずる。實際遙か後になつて其が分つて感謝の歌となることがある。或は此世の幕の閉づるまで分らずに終ることもある。然し最後に天に行て其所から顧みたら、萬事が明かに分つて、あゝ左樣な意味であつたかと、雀躍して喜び感謝するであらうと信ずる。神の工は確に惠の工である。

四

かく世界には人の工がある、神の工がある。そこで我等は自分で第一には人間の工を盡さねばならぬと思ふ。徒らに手を拱ぬいて物の成行に委すは愚な事である。否これは確に罪惡である。基督の譬の中に在る、一千の金を主人より托けられて其を土の中に埋めたものは、主人の還て來たとき罰せられた。我等は働かねばならぬ。我等には神が靈を賦へて在る。之を用ゐなければ、金を土中に埋めたものと同じである。之を用ゐて文明といふものも造り上げねばならぬ。家庭も國も學問も道德も、みな盛んに造り上げねばならぬ。それから又我等は他の靈に我等の工を加へねばならぬ。親は子の靈の中に我子は斯うあつてもらひたいと思ふ其の美くしい姿を畫き、潔い形を刻み付けねばならぬ。子の靈を無字板のまゝに殘して置いて、甚だしきは之を自然の力に委せ、犬

や馬の形の畫かれるのを平氣で居るのは、實に怪しからぬことである。子の靈に惡人の像を刻まするのは親の大いなる落度であつて、愛子を自ら亡ぼしたものである。若し親が自分で子の靈に工を加へることを怠るならば、早いか晩いか必ず泣く時が來るのである。親たる者は神の前に畏れ愼み、精進潔齋の心持を以て子の靈に工を加へねばならぬ。單に親が子にするばかりでなく、友人は友人の靈に向つて工を加へねばならぬ。我等が人と共に生くる間、眞に清き心を以て其の友を愛し、どうかして其人を立派なる人物にしたい、神の子供にしたいと願ふて已まないならば、知る間知らぬ間に、我等は人の靈に神の姿を彫りつけ、早いか晩いか其を完全な精神的の傑作として造り上げるのである。それから又我等は自分自身に向つて工を施さねばならぬ。我はどういふやうな立派なものにならうと、自分で理想を立て、始終其に合はするやうに、自分を進めて行かねばならぬ。

然しながら人の工の上に神の工がある。而して神の工の方は無限に大きくして人の工をも掩ふて居る。神は天地の根本たるもので、凡ての物を造り給ふたものである。我等が一たび神に思ひ到るときには、人間は唯だ神に依りて存らへて居る靈である。神は天地の大生命にして人は其の梢に咲き出た花である。其ばかりか神の工は無限の愛から出でた工である。人間を富ませ豐にし、終には神と全く一なる幸に到らするための工である。そこで我等は人の工を努むると共に、神の工に委する所がなくてはならぬ。世には人の工を以て神の工を妨ぐる者も少くない。神が折角工夫し折角苦勞して居る所を、人が自分の小さな意を働かせ、自分の手を挿し入れて、其を全く打ち毀してしまふのは、我等の常に見る所である。されば我等は人間の工をば或所まで止めて、其の上は天地根本で働いて居り、又人間の世界に活きて働いて居る神の工に委せねばならぬ。否時としては人は全く動くことを止めて、唯だ神の心の成就するに委せ

ねばならぬ。

五

人の工を後に廻して、神の工を働かするとは、どういふ事であるか、其の一つ二つを考へて見たい。第一には先づ自分といふものゝ益を求めることを止めねばならぬ。人には己れを求めるといふことがある。即ち己れを本に立て、己れの利となることを考へ、己れの意の如く物事を行はうとすることである。此れが神の工を妨ぐる最大の障害である。凡て物事を自分を本として考へ、自分の意で行つて行くといふ時には、神はもう退いて手を拱いて立つのである。自分といふものを物事から退けて其所を虛うすれば、神の方が進むで其所に這入て來て、其の工を爲すのである。若し一の家庭の中に人間が自分の意を充たし、自分のまゝに之を動かすならば、もう神は其所に立つの餘地がない、左樣いふ

家庭は決して美はしいものでなく、清い愛の充ちて動く所でない。之に反して若し家庭の中から己れを求むるといふ心が去て仕舞ふならば、其所には夫の私もなく、妻の私もなく、父の私も子の私もなく、唯だ神のみが充ちて、其の清き心、其の溢るゝ愛が一杯になつて居る。若し十人の家族があつて、其の内の一人が己れといふものを去るならば、其の家には十分一だけ神が這入る。若し二人が己れを去るならば五分一だけ神が這入る。十人がみな己れを求める心を去るならば、家には唯だ神あるのみである。此は家のことばかりでなく、一般の社會から言ても同じである。世の中の多くの罪は、人が互に我を立て通し、己れを幸ひにしやうとするから起つて居る。我を去るときに神と一の心となれるのである。マイスター・エッカートは凡ての罪の本は己れを求むるにあり、之をさへ去らば神と一體となると言た。

六

次に神の工を成らする途は、餘り人間が自分で思ひ煩はぬ事である。人間は我身の上、他の身の上について餘りに多く思ひ煩ふ嫌がある。さながら自分の運命を自分でどうでもすることが出來るかの如く惟ふて居る。然し汝等のうち誰かよく思ひ煩ひて汝等の身長を寸分も延べ得むやで（馬太傳六）我等は自分で身の丈の寸分も延ばすこと出來ぬのである。我等は生れやうと思ふて生れたのでなく、死なうと思ふて死ぬのではない。我等の身の上に落ちて來る毎日毎日の事は、我が豫ての經綸を一々行つて行くことではなくして、みな自分より外の力によつて現はれて來ることに外ならぬ。されば何程思ひ煩ひたりとて何の詮もあるものではない。却つて網にかゝつた鳥が、身を悶えて益々絲に搦められる樣なものである。それで寧ろ靜に待つべきである。自分の品性のことでも左

樣である。修養とか鍛錬とかも惡いことはない。然し餘りに多くそんな人工を施してはいけない。或は禪とか靜座法とか、甚だしきは淘宮術とか、其等は皆な一種の思ひ煩ひである。煩悶である。寧ろそんな自分の工夫を全く止めて、靜に神に委さなければならぬ。私が金澤に居た時分、途で屢々車力に遭ふた。何時も一人は引き一人は押して居たが、押す方は極めて平氣で、當り前の押し方をして居るのに、引く方の若い男と來たら、其は大變な骨の折り方であつた。梶棒を握つた上に、更に車から綱をつけて其を肩にかけ、一歩毎に總身の力を搾り出して肩を前に搖かし、引き綱は其の度毎に肩に食ひ入るかと思はるゝばかり。死聲を出して勢をつけ、黑汗にまみれて居た。私は其を見る毎に、あの馬鹿だなと思ふて、心窃に可哀想に感じて居た。思ふに彼は最も忠實に車を引て居ると自覺して居たのであらう。然し車を引くのには左樣することは要らぬのである。靜かに引きさへすれば車輪は前に轉がるのである。車を引くの

に石を引くやうにして、要らぬ骨を折た其の男は憐むべき馬鹿であつた。所が人々の心配の多くは之に似て居る。天地は神の立てた目的に向つて進むで居る。神は我等一人一人のためにも、惠み深い攝理を立てゝ居給ふのである。されば各自の荷を負ひつゝ靜に前に進みさへすれば可い。自分の出來る一番上のことを盡しさへすれば、其で滿足して居るべきである。其上は、神が爲し給ふであらう。其所は神から心配して戴けばよい。神の心配をまで自分が引き取て其の重荷になやむのは大それた仕打ちである。自分で自分の身の上を心配し過ぎては善くない。却つて自分を殺すこともある。先に引た車力の若者は、左樣して自分の身體を無益に疲らせ、其の精力を徒らに消つて居る。も少し適切な譬を言ふなら、親が大病だといふ報知を受けて汽車で鄕に歸つて居るといふ場合には、もはや汽車の走るに委せなければならぬ。然るに餘りに思ひ煩ひ過ぎ、汽車の走りが遲いと言て室內を駈け廻つた所で仕方もなし、まして上り口から飛

び下りでもしやうものなら、忽ち轢き殺されるのである。思ひ煩ふて自分で動かうとする者は之と同じである。そんな愚なことをせずして、唯だ神に委せて居れば、却つて安全であつて事が成就するのである。

他人の身の上の事でも餘り思ひ煩つてはならぬ。ヘンリ・ウッド夫人の『オルヴィル學院』といふ小說に、主人公ヘンリ・バラデインといふ若い敎授が、憂と苦勞との果つひに心臟病にかゝり、倫敦に出て名醫の診察を受けた、すると醫士は靜にヘンリを慰め、よく保養するやうにすゝめ、凡て病は患者自身の心掛如何で重くもなり輕くもなるものだと言ひ、凡て醫士の爲し得る所といふは極めて狹い範圍のことだと加へた所がある。此の醫士の言は大變面白いではないか。實に醫者は自分の力で病氣を取り除けるのでない病氣の治るのを助けるのである、又病氣の重くなるのを防ぐのである。病氣は全く醫者が治すものと思つたら大間違である。外科の療治などは最も明に之を示して居る。手術

をしても醫者は唯だ腐つた局部を切り去り、後に腐敗せぬやうにするに過ぎぬ。醫者は決して肉を造ることは出來ず、健康を造ることが出來ぬ。其が全きに復するのは自然である。神の力である。萬事が左樣いふもの。然るに他人の品性に付て餘りに煩ひ、さながら自分が人物を造り得る如く思ふのは大變な間違ひである。親が餘り子のことを思ひ煩ひ、一より十まで自分の意のまゝに子を造らうとし、箸の上げ下げまで干渉するのは、却て子を害すること明である。可愛い子には旅をさせよといふが、實際親の差出すぎた監督の下から離して、神の導きに委すやうなことは必要である。斯うすれば其の子は人の造つたものでなく、神から造られたものとなるであらう。勿論これは心持を言た話で、文字通りに行ふには善く色々の點から考へてせねばならぬ。兎に角他人の事について、餘り思ひ煩はず、神に委せて、神をして十分に働かせなくてはならぬ。

七

耶蘇基督はゲッセマネの園で宣たまふた。父よ汝に於ては凡ての事能はざるなし、此の杯を我より取りたまへ、然れど我が欲する所を成さんとするに非ず、汝が欲する所に委せ給へと（馬可傳十四ノ三六）自分の意を成さうとせず、唯だ天の父の意のまゝに委す、此が基督の神の子であつた所以である。基督を信ずる者の心は實に是でなくてはならぬ。天の父を知らず之を信せぬ世の人々は、確に自分で萬事を背負ひ、萬事を料理して行かなければならぬから、思ひ煩ひも多からうし、我をも立てゝ行かねばなるまい。然し我等には天の父がある。其の爲し給ふ所は愛の工である。我等に取つて必ず幸の結局に行きつくべき攝理の工である。我等は萬事を神に委すことが出來る。また委さなくてはならぬ。我等は人間の工を十分に行ひ、一番善い所を盡さなくてはならぬが、然し神を信

じ神に頼り神に委せて、我等のために備へられてある終局の限りなき幸に引て行て戴かねばならぬ。

一　神に依る經驗

我等が世に生きて行く間には、毎日種々雜多の物や種々雜多の出來事に觸れる。而して其を一々此れはこんな物、あれはあんな事、或は嬉いとか悲いとかいふ風に心に思ふ。其を經驗といふのである。我等は日々數限りなき經驗をして居る。

此の經驗をすることは靈の作用であつて、從つて人間のみの持前である。動物には經驗といふものは無いらしい。動物は痛いとか痒いとか、其を感じはするらしい。然し其を痛いのであると思ひ、痒いのであると思ふことはなく、痛いから如何しなければならぬ、痒いから如何しなければならぬといふ事もなく、

唯だ痛いときには自然に具はつた本能といふ力の作用で聲を揚げて號ぶとか、痒いときには足を擧げて搔くとかいふにすぎぬ。犬は命ふことを聽く、鯨は子を取られると泣く。然し其は主人の命令には從ふべきものと心で思ふて、從ふのでもなく、我子は可哀想なことになつたと思ふて泣くのでもなく、唯だおのづと左樣されたり左樣なつたりするに外ならぬらしく見える。若し彼等に思ふ力考へる能が少しでもあるならば、彼等も人間のやうに段々進むで立派な者となつたに相違ない、然し彼等に其が無い所を以て見ると、矢張感ずる力だけあつて、思ふ力がないのである。

然るに人は左樣でない。人は自分の外にある事や物を、唯だ目や耳で感じて知つて、おのづと其を撥き反す、即ち痛い時にはおのづと顏を蹙める、可笑しい時には自然笑ふといふばかりでなく、實に此れは痛い事であるわいと思ひ、又は此は可笑いなと思ふのである。彼は心で思ふ。即ち其の痛い事可笑い事は

彼の心の中に這入て其所で留つて活動をするのである。此れが經驗である。それで經驗は靈魂あるものにばかり在ることで、靈魂あるが故に經驗があるのである。

此の經驗といふことがあるから人間の世界は段々進むで行く。物事に打つかると人は其を心で考へる。此れはあゝいふ譯で斯うなつたのである、だから此後は斯うして行かねばならぬ。といふやうな事も思ふて、或は益々自分の行きかけた途を進むだり、或は全く方針を改めたりする。もし心の經驗といふことがなく、唯だ身體で物を感じて行くばかりであるならば、雨が木の葉に降り注ぐやうなもので、どれほどの物事が降りかゝつて來ても、人間は一寸も上に昇つたものとはなれぬ。今日の世の中がこれほど萬事整ふて居るのも、幾萬年の古から人間に心の經驗といふものがあつたからである。

我等の一人一人の立派な人物になれるのもまた經驗といふことがあるからで

ある。生れて死ぬるまで我等の一生は實に經驗の繼續である。老人は多くの經驗を積むだから其で物が分り賴もしいと屢々いはれるが、其の經驗といふ語の意味は少し異ふけれど、矢張同じ意味に取ても可い。確に老人は多くのことを經驗した。其でまだ僅の事しか經驗しない者に比べると、よく物事の分別もあり、物事を處置して行くにも巧い筈である。其のみならず、經驗を多く積むだ靈魂は其だけ內容が豐で奧行が深い道理である。

喜ばしい事悲いこと、大きい事小さい事、海の波のやうに、朝から晩まで我等の心に打ち寄せて、心に限りなき形を刻みつける。心は其に由て鍛はれる清められる。刀は打つほど切れるものとなり、布は晒すほど白くなる。靈魂も其と同じである。精神上の秘藏息子、箱入娘は駄目である。茲でも矢張曾て愛せし事あるは一たびも愛せし事なきに優るといふテニソンの句を思ひ出す。嬰兒が生れてすぐ死んだ、又は結婚して幾何も經ざるに妻か夫を喪つた。其でも決

して子供の生れざりし方が幸ではない、結婚しなかつた方が幸ではない。自分が其だけの經驗をした。自分の靈魂の內では生れてからまだ現はれず活動かなかつた愛の心が現はれて活動いた。其ほど自分が進歩したのである。否矢張新しくなつたのである。日外或る新聞に樂器の話を書いてあつたのを記臆するが、ヴアイオリンの胴には、伊太利のヴエネチエの材が一番よいさうである。其はヴエネチエの山奧から其の材を切り出すのに、立木を切て其を山から谷底に轉ばし落す、其から水に浮べて川下に送る。其の間に木が轉むで、木の分子が丁度善い案配に震つて、其で樂器とすれは大變善い音の出るやうなものとなるといふことである。私はこんな話が果して信ずべきか如何かを知らぬ。然し左樣いふ理屈は有りさうである。靈魂の方では多くのことが心の中に震ひこむで居るもの即ち多く經驗した者ほど、美はしいのは道理であり、又大抵の所まで其が實際である。

そこで人は經驗をする者であり、經驗をすることは眞に尊いこと結構なことである。

二

所が經驗することには前にも言た如く色々ある。朝から晩まで我等は何程の經驗をするか知れぬ。一生の間經驗した事と言たら其は何を以ても顯はせぬ。其等の經驗は確に結構なことではあるが、其がまた左樣と謂はれもするし、又謂はれもせぬ所以があるのである。

隨分世の中には無用の經驗があるやうに見える。私の知て居る或學者は玄關に長話御斷りのことゝいふ貼紙をして、客をそこ〳〵に追ひ退けて居る。然し私が行くと何時間でも引き留める。忙がしらしいではないかと聞けば、否々長く尻を据ゑて下らぬ話をする者が多くて困るからあんな貼紙をしてあると言

ふ。實際そんな氣になることもある。確に人に接するのは獨で書齋に籠つて居るよりも多くの經驗をする筈である。然し其があまり下らぬので、却て書物を讀むで居る方が善い經驗をすることになり、それで客をも斷るやうになる。私は旅行が嫌ひである。避暑なども自分の身體にどうしても必要となつたまでは如何なる時にもしなかつた。夏に高山に登るやうなことは好きである。此れは性分にもよるであらう。然し旅行や避暑をして下らぬ事を見たり聞たりするのが厭なのであつた。それで近年になつて避暑しても同じ所に落ち着いて人民の生活や土地の事を研究した。それで私は青年などにも餘り動き歩くなと言て居る。子供の時に彼方此方と伴れて廻るのは尙よくないと思ふて居る。色々の事が唯だ走馬燈のやうに心に映つて來て、一向其が深い所まで入らず、深い思想を起させない。其の癖がつくと成程口は達者で、物事をば多く知て居て、他人をば頭から馬鹿にして、一寸取り着きは中々立派で、偉い者のやうに見えるが、

さていよ〳〵何かさせて見ると何も出來て居ない。間口ばかりで奥行は些もない。大いなる都會に居る者などは餘程氣を附けぬと可けない。一體旅行などで益を受くるといふのは、其はもう一通り研究の出來て居るものが、いよ〳〵實際の物に當つて其で確な所を覺るとか、又は實際の物に當つて見れば其に由て自分が獨りで考へる事も出來るとかいふので始めて有り得る事で、まだ何も頭も心も出來て居ない子供や、面白がつて飛び廻つて居る者などが、其に由て何の益をも受ける筈はないのである。

それで經驗も心しないと無用のものが多く、心しないと無用になる。もし生涯無用の經驗ばかりをして行くならば、其の生涯は全く意味のないものとなつて仕舞ふ。否無用の經驗ばかりの積いた生涯は無用の生涯である。

然し經驗が唯だ無用になるばかりならまだ可いかも知れぬ。心を用ゐぬと凡ての經驗は我等の靈を害する所のものとなる。患難汝を壁にすなどいふが、

しかし動もすれば折角の大いなる經驗が却つて太だしく其人を毀つのである。確に經驗を重ねて人は益々惡くなることが多いのである。俗に海に千年山に千年といふことをいふが、其等は皆な他に優りて多くの經驗をした者を意味すると共に其の經驗によつて人物が甚だ惡摺れたことを意味して居る。經驗は多くの人の靈魂を硬く頑にして仕舞ふ。ウォルヅウォルスの詩に、少年の時には、牧場も森も小川も地面も、凡ての有りふれた景色が天の光で裝はれて見え、光榮を以て輝き、夢のやうに珍らしく現はれて居たが、今は其時のやうでない、何所を見ても、又夜でも晝でも、自分の昔見たものは今は見られぬ、とあるやうに、年を取るに從つて心が硬くなり鈍くなり、もとは感じたことが感ぜられなくなる。曾ては張り裂く程に感じた事でも、後には涙一つこぼさなくなる。昔は宇頂天になつたことも、今は莞爾ともせぬやうになる。さうなつた時には、もう濡ひもなければ血の氣もない、一向面白味の失せたものである。どうか何

所までも初心初心しく、一寸切つても血が迸り出るやうな靈魂で居たいものである。特に大いなる出來事に出遭つたものは、隨分その性格を損つて居る。ひどい貧乏でもすると大抵のものは根性が扭ぢ曲つて仕舞ふ。貧民病院などでは成程看護婦にも惡い所はあるらしい。如何にも自分が助けてゞも居るかの如く、萬事に恩着せがましく、高慢顔に振る舞ふこともあらうが、矢張患者の方にいぢけた所があつて、いつも〳〵困り切て居る。人間は病氣をしても矢張いぢける。いぢけないまでもいやに神經が過敏になつて、もとは中々構への大きかつた人物でも、甚だ始末し難くなる。女の人だと嫁に行かないで居て變になる者も少くない。年の寄るほど人を困らせる。其かと思ふと學校などでは非常に立派な人物であつたのが、嫁に行て俄然變つて鼻持もならなくなるのもある。

さういふ風に經驗は人を發達させるものであつて而して一方には恐ろしい力を持て居る。我等の生涯を無用ならしめたり、又我等を段々惡い人物としたり

して居る。然るに我等はどうしても經驗といふことをせずには居られぬ。我等が靈魂の生物である限り、我等は生きて居れば經驗をして行くのである。そこで其の經驗を、眞に善き經驗であらしめ、其の經驗の續いた我等の生涯をば、眞に甲斐のある生涯とせねばならぬ。其は如何にしたら可いか。

其は外には途はない。凡ての經驗を神に持て來て聖なるものとするのである。又言ひ換へれば神を信じ、神と一つになつて居て凡ての事を經驗するのである。

三

一體經驗といふものは我等の身體がするのでなくて心がするのである。そこに非常に面白い所があり、其所が經驗といふものに付て我等の考へねばならぬ所である。身體で痛かつたり痒かつたり感ずるのは動物も人間も同じである。然し人間は其の痛いこと痒いことを靈の內に引き入れて考へる。そこで身體

には同じく痛いことでも其の結果は大變異つたものとなる。俗に牡丹餅で頰桁を叩くといふが、牡丹餅で叩かれても、敵の握り拳で叩かれたのと變らない痛さを感ずるであらう。然し敵に對しては眞赤になつて怒つても、牡丹餅で叩いた者をば眞赤になつて喜ぶのである。母親が子供を抱いて歩く、あれが荷物ならば隨分苦しいであらう。然し同じ重さでも此の愛らしい荷物だと嬉しくてたまらぬらしい。其は何故か。身體に感ずるのでなくて經驗するからである。それで同じ物事に同じやうに出遭つても、靈魂の性質や有樣に由て、其が一方には非常に價ある經驗となり、他方には全く價のなく、却つて害となる經驗となるのである。

例へばゴルゴタの丘の上に三つの十字架が立てられて居た。生れた時は異つて居たであらうが、同じ日同じ時に同じやうに木の上に曝され、周り圍む群衆に嘲けられて居た。肉體には同じく其が感ぜられ同じ運命に行着くのである。

然し其の中央なる耶蘇には此の十字架は人を愛するために如何しても受けねばならぬもの、神の心を行ふ一つの塲面、又榮光の途であつた。傍なる一人の盜賊には、己が爲せしことの報であると共に、悔い改めを催したもの、基督の救を仰ぎ求める動機であつた。殘れる一人の盜賊には、實に肉體の苦痛、恥、罰、死の外何の意味もないものであつた。萬事斯くの如く事は同じでも、其を經驗する人に依て、其が色々に異つた意味のものとなり、異つた結果を起し、或者をば天にあげ、或者をば冥府に墮すのである。即ち人によつて經驗が異つて來るのである。

然らば我等の出遭ふ物事は、もとは何も意味の無いものを我等が自分の心で意味を附けて考へるのであるか。左樣見えるかも知れぬが左樣ではない。牡丹餅で頰を叩くのと、螺のやうな拳で撲るのとは、確に原から意味が異つて居るであらう。然し動物ならば唯だ兩方とも同じやうに痛いことが分るだけなので

泣いて逃げるのである。其を人間は是は自分を惡むでするのだ、是は自分を愛してするのだと心で考へる、其が愛された又は惡まれたといふ經驗となるのである。天地の間全く神が在さぬならば、在しても冷かな神か殘酷な神であるならば、我等に起つて來る物事は何の意味もなく、意味のないものを我等が自分の心から意味をつけるのであらうが、然し神まことに在し、活きて我等と交りが出來るならば、天地間の出來事は我等に取つて初から意味を有て居るのである。其の意味を本當に考へ覺ることの出來るのが、靈魂の生物たる有り難さで、他の物は無心に感じて過して仕舞ふことを、人間が心で覺るのである。天地の本にある大いなる神と我等人間とは、即ち心と心を以て交はり互に心を解し合つて居るのである。

四

茲に於て神を信じ神に頼つて居るものと然らざるものとは同じ事に接しても其所に雲泥萬里の異つた結果を起すのである。我等神を信じ、神に頼り、從つて神から惠を受け、神の大いなる力、其の清き德と慈愛の心とが、我等の靈の中に注ぎ入れられ、靈が清められ又愛で充たされて居るならば、斯ういふ靈のなす所の經驗は決してつまらぬものでないことは言ふまでもない。他の人には實に下らなく感ぜられる毎日毎日の小さな經驗、其が一として無用のものでなく、悉く大いなる意味を持ち、靈を動かし、之を鍛ひもし清めもし築きもすることになる。他の人には極めて低い經驗となることも、其が非常に高い、我が一生の最も美はしい時を作る經驗となる。他の人をば害するやうなことも、其が基督信者の心に這入ると、其の靈を養ひ、大いに之を益するものとなる。神を宿して居る靈は凡ての物を黃金化して立派な經驗とするのである。

基督は心の貧しき者は福なり、天國は即ち其人の物なればなり、哀むもの

は福なり其人は慰を得べければなりと仰せられた（馬太傳五ノ三、四）。基督の眼には凡て人の目につまらなく見えた者が却つて幸であつたのである。彼は心の貧しい裏に最も大いなる福が潜むで居ることを見た、哀むで居る者が見えない所で大いに安慰を得て居る事を認めた。基督の此の敎は馬太傳には斯う出て居て、多分原は此の通りに敎へられたのだらうと思はれるが、然し斯う考へて路加傳の記す所を見ると一層適切に此の心を表はしてあるやうに覺える。曰く、

汝等貧しき者は福なり、神の國は即ち汝等のものなれば也、汝等今飢ゑたる者は福なり、飽くことを得べければなり、汝等今哭ける者は福なり、笑ふことを得べければなり、人の子の爲に人汝等を憎み又遠ざけ詈り汝等の名を惡しゝとして棄てなば汝等福なり、其日には欣び踊れ汝等天に於て報い大なればなり、彼等の先祖が預言者になしたりしも是の如し、汝等富める者は禍なるかな、既に安樂を受くればなり、汝等飽ける者は禍なる哉、飢ゑんとすれ

ばなり、汝等今笑ふ者は禍なるかな、哀み哭かんとすればなり、凡の人汝等を譽めなば汝等禍なる哉、彼等の先祖が僞の預言者になしたりしも是の如し（路加傳六ノ二十より二六）

世間普通の經驗では貧ほどつらいものはない。四百四病の患よりもと言はれた通りである。然し神を信じ凡ての事を神に由て黃金化した基督の眼には其に福があつた。何となれば此世の事に貧しいが故に、其人は財に賴まない、又財を求めない、又財に付て心配しない。左樣いふ必要もなく、左樣いふ事に關係がないので、左樣いふものから心が捕へられ攪き亂さるゝ事なく、只管天國に付て思ひ、天國を得やうといふ心で居る。其の心は淸い。物の累ひから脫け出て居る。天國に入らうと心がけて其の途を盡すのであるから、確に天國は取れる、其人の物である。然し斯ういふ風に神を信じ神と一つ心になつて居ると、唯だ貧しき者が福なるのみならず、實に富める者も福なのである。世の並

並の靈であると基督が後に附けて言はれたやうに富める者は禍である。彼等は富貴のために淫せられて居る。心は財や位の中に埋もり、其から脱け出ず、耽り、驕り、貪るのである。其の靈魂は哀れむべきものである。然るに神を信じて富むで居る者は、心が財や位の上に脱け出て神の中で生きて居る。其等の物で支配せられず、却つて其等の物を神の心で支配する。斯ういふ人は一方には貧乏人のやうに生活の憂がないから心が物の力に追ひ廻はされず、静かにして專ら高尚なことを思ひ、神に從ふことが出來る。此れ非常なる福ではないか。更に其以上に出て、其の富や位を最も善く用ふる者に至ては一層福であらう。斯ういふ例には直ぐ思ひ出られるのは獨逸のツインツエンドルフや英國のウイリアム・ペンである。ツインツエンドルフは十八世紀の獨逸の貴族であつたが、神を畏れ敬ふの心最も厚く、自分の領分の内に熱心なモラヴィア派の人々を庇ひ、自ら同教派の首とせられて力の限を盡し、外國に行ても所々で同

教會を立てた。ペンは十七世紀に於て、英國で色々の困難の中を、最も深い静な友會の信仰で立て貫き、到頭信仰の自由を得、理想の社會を立てんとして、米國の土地を王様から申し受けて其の志を達した。後のペンシルバニアを中心にした所が其所である。ペンシルバニアといふ名はペンの田舍といふやうな意味の言から來て居るのである。

基督は次に今飢ゑたる者は福なり、今哭ける者は福なりと仰せられたが、此も同じ理で眞であるは言ふまでもない。馬太傳の方には哀む者は福なり、其人は安慰を得べければとある。眞に此の世の事を失ふて哀むで居れば、もはや此の世の事を樂まず之に望を置かず、唯だ神に向つて安慰を求むるやうになる。かゝる人は福である。其他基督のために迫害せらるゝ者に至ては一層福である。當に欣び踊るべきものである。

斯くの如く神を信じて居るものゝ靈には、貧も富も、悲も喜も、凡ての

ことがみな立派なる經驗となり、其に由て靈が常に進歩し、次第に美はしい者となるのである。一つ一つの經驗が皆な生きて居り、皆な價があるから、其の經驗で成り立て居る靈、其が續いて出來て居る一生涯は、眞に充實したもので、何所を掬ふても光が映つて居る。

五

一生の經驗は數限りなくして、其が神を信ずる者には皆な尊い寶を蓄へることになるのであるが、殊に大いなる經驗をする時は、其が信仰あると無いとに由て非常な差別を人の身の上に起すことを考へねばならぬ。

我等は屢々靈魂一杯の經驗をする。靈魂を底から引くり覆へしてかゝらねばならぬことに出遭ふ。其は幸なる事もあり不幸の事もある。此の塲合もし神に結び着いて居らぬならば、全く身を滅ぼして仕舞ふのである。多くの人は幸

福のために誤られるではないか、然し非常なる不幸のために倒れるものに至ては更に多いのである。然るに信仰ある時は此が安全であるばかりでなく、之に由て大いなる發達をする。

舊約全書耶利米亞書四十八の十一に、モアブは其の幼き時より安然にして、酒の其の滓の上に留まりて此の器より彼の器に斟み移されざるが如くなりき、彼れ擄へ移されざりしに由りて其の味尙保ち其の香氣變らざる也といふ句がある。ブシュチルも之を引て說敎して居る。其の句はイスラエルの預言者エレミアの言で、其の意味は、イスラエルは古から度々敵國外患を蒙つた、特にエレミアの時に於ては、バブロニア人が押し寄せて來て、イスラエル人の花ともいふべき者どもを虜にしてバブロニアに携れて行て仕舞つた。是にはイスラエル人は大弱りであつた。戀しい故國からは引き離され神の殿をば跡に殘して其の荒るゝに委せ、自分等は唯だ裸の樣になつて、運河多きメソポタミアの土

地に寓つて居た。彼等は亡國の流離人であつた。之に反して直ぐイスラエル人の隣に住むで居たモアブ人は如何かといふと、古から曾て左樣いふ憂目に遭たことがない。そこで普通の人はモアブは未だ曾て辱を受けたことのない、眞に一個所に落ち着いた幸福な人民だと思ふたであらうが、預言者は左樣思はなかつた。モアブは酒が槽から槽へ汲み移されず、いつまでも滓の上に留つて居て、味も善くならず、香も善くならないやうなものだ、イスラエルは其と反對であると言た。實に酒は屢々汲み移されねばならぬ。其に由て滓を清め除けることも出來るし、又其の間の動搖に由て善い案配に味と香が着く。昔江戸で灘の酒が珍重されたのも、船に積むであの遠州灘を通る間に大波に搖られ、其で味と香が善くなつたからだとの事。人民も同じである。確にイスラエル人は度度の辱めに由て精神を清められた。特にバブロニアに捕へて行かれたことに由て、人民は其の昔バレステナ打ち入り以來、どうしても染みこむで拔けなか

つた偶像禮拜の心から全く清められ、今度こそ本當にエホバを拜む者となつた。且つ又彼等は其の亡ぼされたのはエホバの心に背き罪を犯したゝめであるから、もはや二度と左樣いふ罪を犯してはならぬといふ心となり、大いに省み大いに清くなつたのである。預言者が酒に譬へて人民の不幸を却つて幸としたのは道理と謂はれる。我等にも斯ういふ事が多い。我等も靈魂の底から倒にして振り覆へされて其れで一新することが多いのである。

或は又そんな大いなる事件が唯だ一度落こちて來るといふばかりでなく、長い刀を頭から足まで刺し通されて居るやうに、一生苦痛を抱いて其が拔けぬこともある。實はこれほどつらいものはない。多くの人は其に由て狂氣のやうになる。然し是も信仰のある時は非常に美はしく尊い結果となるのである。若し我等の靈魂が神の心で充ち、基督の精神で徹底して透き徹つて居るならば、此の拔けない一生の刀は琥珀の中の美くしい木の葉よりも趣がある。若し我等

の靈が神で充ち基督で徹底して、其から出る所の行や言が凡てみな神らしく基督らしいものであるならば、其の一生取れずに差しこまれてある苦痛は、丁度眞珠貝の中の珠を見たやうなものである。眞珠貝はもと小さな價のない貝である。然し其が過つて砂を抱きこみ、其がために傷をして、而も其の砂が拔けずにあると、貝は其の傷から絶えず液を分泌する。其が固まつて眞珠となり、年を經て幾千金も價するやうな寶玉となる。我等の靈ももとは極めて小さな價のない者であらう。然し神を信じ、萬事に神が出て來るやうになると堪へ難き刃を抱いて、其の傷口からは血が出て居ても、其の血が凝つては眞に尊い玉となる。即ち我等が堪へ難い一生の苦を抱いて、其を一日々々處置して行く間に、考へたり言たり行たりすること悉く神の心基督の御旨であり、其の固まつた品性は、眞に光玲瓏として四周に輝きわたる神の子の姿となるのである。茲に至つて其の苦痛は即ち我を玉にするものであつた。基督の十字架は即

ち其の何よりの模標である。

六

我等には日々刻々の物事が皆經驗となる。物事には大いなることも小さい事も嬉しい事も悲しい事もある。其は確に原から深い意味の有ること丶思はれる。然し若し我等の靈魂が本當のものになつて居ないならば、此の無數の經驗は悉く無用のことであつて、我等は十年一日の如く進歩のない小さな生活をして、一生涯を何の價もなく、非常に不幸に不快に不名譽に終らなくてはならぬ。其のみならず、經驗を重ねるほどいよ〳〵靈魂が硬く鈍くなり、墮落し果てるのである。靈魂一杯の大事件に出遭ふ時には、其に由て顚覆せられ、全く破滅に至るのである。そこで靈魂を本當の有樣にして置かなくてはならぬ。神を仰ぎ、神に賴りて基督と一つ心となつて生きて行くが即ち其の途である。さうすると

きには凡ての經驗は生きる。一つとして無駄のものはない。我等の一生は充實する。大いなる事に出遭ふほど靈魂は清められ强められて、神の子供の榮光を以て充たされるのである。

人間根本の救

一

耶蘇基督が或時カフアルナウムといふ邑に入り一の家に留まつて居た時、其を聞き傳へて澤山の人が其所に集つて來た。耶蘇の尊い敎を聞かうとし、又は耶蘇から病氣を癒されやうとして、耶蘇に隨いて來る者が、其の頃は大變多かつたからである。そこで群衆のため小さい家の中は勿論、其の外の狹い苍は一杯に塡まつて仕舞つた。耶蘇は其の中で敎を說いて居た。所がそこに一人の癱瘓の病人を四人で舁いて來たものがある（馬可傳二ノ一以下）。猶太人の寢床には丁度呉蓙を見たやうなものがあつた。其に病人を乘せて四隅を釣て四人で舁いて來たのである。其が來て見ると中々耶蘇の傍に寄り着けさうにもない。病人はあれほ

ど耶蘇を慕つて居たし、其まゝ引き返すは如何にも殘念だと、四人は切りにあせつたが、親切な心は手段を產み出すもので、誰が思ひついたか、屋根に上り其所に病人を吊り上げ、更に蓋をめくつて穴をあけた。猶太の屋根は低くて扁たく、下に梁をわたして土を塗た者で有たから、そんな事は自由に出來た。而して其の穴から耶蘇の敎を說いて居る前に病人を吊り下した。耶蘇も驚いたであらう、人々は尙更驚いたに違ひない。

耶蘇の且つ訝り且つ慈しむ眼は病人の顏に注いだ。病人の眼は耶蘇の面を見入つて居る。群れ居る人々は一齊に耶蘇と病人とを見つめた。彼等は耶蘇は之を如何にするかと疑つた。然し彼等は其まで屢々耶蘇が病人を醫した事を見て居る。彼等は直接に耶蘇に會ひ、又は人傳に聞て、耶蘇が人間の不幸に同情し其を取り去てやる事に力を盡すのを知て居る。耶蘇の心は慈愛で充ちて居ることを知て居る。そこで屋の上の友人等も屋の下の群衆も齊しく耶蘇は此病人を

醫してやるであらうと待ち望むだ。彼等は耶蘇の口から病を癒す辭を聞き、耶蘇の手から醫の行を見やうと思つて居た。

二

此れは實に猶太人が救主に向つて求めた所であつた。彼等の多數が求めて待て居た救主は、全く此世の事を整へる大人物であつた。救主はダビデ王の血統から生れて、猶太國を救ひ、猶太を富み榮えた國とし、人民は全き幸福の內に生きるやうになると信じて居た。然るに耶蘇が現はれては、病を醫し諸の不幸を取り去てやるものであるから、此の救主は左樣いふ風に人の物質の上のことを救ふてくれる者であると信じ、基督に向つてはそんな事を求め、其を求めて雲霞のやうに隨つて來た。

何時の世でも人は此の方の救を求め、其の救主を探して居る。彼等は病を醫

してくれといひ、金を儲けさせてくれと言ひ、快樂を與へてくれと言ひ、或は社會を幸福にしてくれ、國を富ましてくれ、兵を強くしてくれと言て、一心に其を求める。さうしてくれる者があらば其が彼等の救主で、さういふ救主なら三拜九拜して崇め奉らうとするのである。彼等はそんな救主の現はれることを待て居る。そこで基督に對しても望む所はさういふ救である。何か物質の方の缺けた所、乏しい所を感じて、其を得やうとして暗中を探り、基督を執へて之を求めるのである。

勿論耶蘇基督は其の望を遂げさせてやつた所もある。耶蘇は此世に生きて居る玉ふた間は、人間の不幸に同情し、到る所力の限り之を取り去つた。耶蘇は人間の世界の喜び悲みの波の中から足を拔いた人ではなかつた。どこまでも其の中に在て之を動かした。其故今日と雖も如何なる苦み悲みを耶蘇に訴へてもよろしく、又訴へる時には必ず何等かの助は與へられる。最も行き届いた助を

與へられるのは基督信者の經驗する所である。

三

けれども基督の御働きをおもに其所に於て望むならば必ず失望する。見よ基督は自分の目の前に吊り下された癩瘋の病人に向つて、人々の豫期して居たやうに直ちに醫の活動をしなかつた。却つて之に向つて『汝の罪赦さる』と言た（二ノ五）。此れは凡ての人に取りて實に案外千萬であつた。或者は失望した。張りつめて居る心も切れて仕舞つた。他の者は唇を反らして其れ見たかと言た。彼等は癩瘋の病人の吊り下されたのを見て、耶蘇之を醫すや否や、若し醫し切れなかつたら、其こそ面白い座興であると、目を見張つてまもつて居た。然るに耶蘇は其を醫さうともせず、唯だ罪の赦されたことを言た。是は耶蘇の力の無いことの暴はれたのだとして非常に氣味よく感じたのである。所が或者は之

を以て耶蘇を甚だ狡猾な奴だと思ふた。耶蘇には何の力もない、然るに斯ういふ難病人を持て來られて彼はほと〳〵當惑して仕舞つた、そこで人の揚足を取ることの出來ないやうに、汝の罪赦さると言たのだ、身體を治すといへば目に見えて病人が變らねばならぬ、然し其は出來ないから、目に見えぬ精神の方のことを言て、此の場合の困難を遁げたのだと、パリサィ宗の人々は斯う思ふたのである。そこで遁げやうとしたとて遁がすものではない、彼等は却つて耶蘇がこんな事を言ふのは甚だしい不敬だ、人の罪を赦す者は神より外にはない、然るに耶蘇が其場逃れのために斯んな事を言ふのは、此れ即ち神を褻すものであると考へた。

四

斯く耶蘇の仕打について不平であつた其場の人々の心持は樣々に變つて居た

が、彼等を一貫して居る思想は、耶蘇は差し掛つて居る實際の問題を外らして仕舞つて、極めて用のない全く仕ても仕なくても可いやうな、有ても無くても同じなことを行ふたといふ事であつた。特に病人を舁いて來た四人の友だちや、其他この病人に同情ある邑人は、耶蘇が仕てくれゝば善いことをせずして、餘計なことを言て居ると思ひ、『求めたり然れど與へられず』といふ不平で充ちたに違ひない。彼等の眼は唯だ身體にばかり注いで居た。彼等の願は唯だ物質の方ばかりに凝つて居た。耶蘇の仕打は全く壺を外れて一向利目のないものといふ感に堪へられなかつたのである。耶蘇は迂遠だ。彼等は如何にも齒痒かつた。

眞に耶蘇は迂遠のやうである。其時の人々に左樣見えたばかりでなく、今日の人にも耶蘇は迂遠である。耶蘇は一體何をする人か。耶蘇を信ずれば如何してくれるのであるか。信じた所で身の上に目に見えた變化はない。金が儲かるではなく、病氣が治るでもない。勿論それは信仰のために人物が立派になり、

よく勞きもするし、正しき道を行ひもするから、其方から金の儲かるやうになりはする、又精神が盛になり、下らない心配などもせず、身體を汚れたことや餘計なことに使はなくなるから、病氣も少くなり、病氣にかゝつても他の人なら治らぬものが治りもすることも多い。さういふ間接の功德ばかりでなく其は眞に無くてならぬもの、人の幸福のために自分が用ゐねばならぬものなら、不思議な途から金が與へられることもあらう、又祈つて病が治されることもあらう。然し其は其程著しい信仰の獲物とはいへぬ。目に見えた變化といふは其は先づ無いと言てよろしい。そこで世の人は基督敎を用のないものとし、耶蘇の活動を迂遠のことだとする。有ても無くても殆ど差別のないこと丶思ふ。

彼等はもつと人間の生命に直接に觸れたことを求める。覿面に基督敎があるために是れ〳〵の利目がある、病氣は治る、金は儲かる、地位は得られる、家は富む、社會は幸福になると、丁度新藥でも用ゐた時のやうに、二十分三十分

から、すぐ其の作用の現はれるやうなことを望むで居る。そこで宗敎では間どろこしくて耐らなくなり、世の中の事業をして目前に結果を見やうとする者が多くなる。宗敎などいふやうなそんな目に見えぬ利目の現はれぬものを自分で信じたり人に勸めたりするのは、丁度大海の中に一杯の油を入れるやうなもので、一向反應はなく、頼ない至である、其よりは手答のある、蒔けば必ず刈る活動をする方が可いと考へるのである。即ち社會を改良して、貧しき者卑しき者も、飽くまで食はれ、暖に衣られるやうな工風をすることの方が、宗敎などよりは餘程急なことで、實際を動かすことで、用のあることだとする。宗敎家の中にさへ、幾年幾十年、働けども骨折れども、自分の働が一向反應がない、笛ふけども踊らず、哀愁をすれども胸うたずといふ有樣であるのを見て、これでは仕方がないと絶望して仕舞ひ、世の中に飛び出して、直ぐ利目の現はれて來る事業に乘り替えるものも起るのである。

五

然し耶蘇基督は物の見方が違ふて居る。彼は全く其等の人とは異つた所に立つて物事を見て居る。そこで物事の價が全く顚倒して居る。

先づ基督は事の容易いと難しいとに付て他人と異つた見方をして居る。前に引た癩瘋の病人を圍むで居た人々の考へでは、罪を赦すと言ひ渡すのは至て易く、病を醫すは甚だ難いと思ふたのである。其は道理で、罪を赦すといふ方は、人々には見えぬ事で、唯だ口で言ふことだのに、病を醫す方は目の前に現はれる事であつたからである。然し其が基督の目には全く反對であつた。基督には病を醫すは易く、罪を赦すは六かしかつたのである。

確に病を醫すは比べて見て易いことである。名醫は難病を醫すではないか。固より醫者の癒せぬ病は多い。否々凡ての病は醫者の癒せぬものと言て可い位

である。もし癒せたら死ぬる人は無くて濟む道理。醫者の力で凡ての病氣が治ると思ふたら間違である。我等は唯だ治るべき病を醫者に委せて治らない病どせぬやうにして、其で治さなくてはならぬのである。けれども醫者は隨分難病を治す。癌の如きは、到底治らない病とされて居たけれど、近年になつては其がまだ初の間であるならば、或はエックス光線や又はラヂウム活動を其の局部にかけて、其の癌を散らして仕舞ふやうになつたさうである。其の種類のことは澤山あるであらう。學問が進み、醫術が進むでからは、死ぬべき病人が死なずにすむのは、甚だ多くなつたのである。馬可傳二章の癩瘋患者は、老人のやうにも見える、聖書の學者で左樣解く人もあるが、然し基督が『子よ汝の罪赦さる』と言てある所を見れば、まだ若者であつたらしいと言ふ人もある。そんな若い者なら、たとひ病氣は癩瘋でも、醫者の力で段々治るかも知れぬ。

所が罪を赦すといふ方になると中々左樣でない。此れは手で觸れ目で見る物

質を超えて、其の背後の精神のことである。其所にはたとひ耆婆扁鵲のやうな名醫であらうが手の下しやうがない。解剖のメスの尖も屆かない、効能神の如き新藥も反應がない。所が耶蘇の目で見たのは其所である。耶蘇の手を下したのは其所である。多くの人は形を見る、肉體のことを心配する。形さへ立派ならば、其で喜むで居るし、肉體さへ健になれば、其で安心して居る。然し耶蘇は其人の靈を見る。耶蘇の目は靈に注いで居るから、肉體のことは見えぬ位。少くも後になつて居り、隱れて居る。そこで肉のことをば措いて靈のことを問題として、之に向つて手を下すのである。だから『汝の罪赦さる』と言たのは、他の人には當突であつたであらうが、耶蘇には當然の事で、耶蘇としては其に出でざるを得なかつたのである。

六

思ふに此の病人は其の不隨の軀を久しく床に横たへて居たのであらう。其が近頃になつて耶蘇の噂を聞いた。耶蘇の評判は其頃は大したものであつた。カファルナウムはガリラヤ湖の畔では相應な邑であつたらしいし、地中海の方からダマスコへ通ずる街道の一つに當つて居るか、當つて居なくても其に近かつたらしいから、方々からの人が集つて來た。其が耶蘇の事を口々に話す。耶蘇に神の如き力があつて、多くの病人を治したといふことも聞た。耶蘇の敎の新らしくて、靈魂を生き返らせ、神との關係を非常に密にする力のあることも聞た。耶蘇の人格の高く美くしく接する者を動かして清める力に充ちて居ることも聞た。彼の心は其方に吸ひ着けられるやうな心地がしたであらう。身體の利かぬ病にかゝて、唯だ病床に横たはつて爲すこともなく考へてばかり居るといふ身には、靈のこと神の國の事などが只管思はれて、彼の心は肉の思ひが濾されて、唯だ靈のみとなつて澄み透つて居たであらうから、靈的な耶蘇の活動

は、人々から傳はり傳はつて此の病人の靈に波の如く打ち寄せて居たであらう。特に耶蘇はカフアルナウムを中心にして活動いた。耶蘇の動かして居る波は、病人の枕頭をまで掠めた。彼は戸外で人々が噂して居る談話に鈍つた耳を引き立てたであらう。否時には耶蘇自身が通つて行く物音、人々の隨ひ行く騒ぎを聞いたかも知れぬ。其が友人の情で耶蘇の所に伴れて來られ然も耶蘇の前に吊り下された。彼はいよ〳〵耶蘇の顏を見、耶蘇の聲を聞た。周圍の人々の耶蘇に對する熱心な樣子の中心に投げこまれた。其の心持は如何であつたであらうか。彼の心臟は騒いだに違ひない。否寧ろ磑と皷動を止めたに違ひない。彼の眼は引き着けられたやうになつて耶蘇の優しき面に注いだであらう。耶蘇も彼を見戍つた。其の刹那は動物電氣のか〻つた間の如く、呼吸と呼吸は合つて仕舞つて、世界もなければ、群衆もない。

病人の心はやがて我に歸ると共に、陽極の電氣と陰極の電氣とが初め引き合

つて居たのが、其が相觸れ合ふと今度は撥ね合ふやうに、自分が耶蘇の全く清く美はしき品性に接して見ては、我が罪深く汚れて居るのを愈よ切に感じて、耶蘇と自分との間には其所に底なき淵が出來て居るやうに感じ、折角天にまで近づいた自分の靈は忽ち九地の下に撥ね落されたやうな心地となつた。

耶蘇は其を見た。人々の見ない所は其所である。其所を耶蘇は見て、其の的星を射て、子よ汝の罪赦さると言た。病人は之に由て其の心が躍り上つたであらう。耶蘇の眼は靈界に向つて廣く開いて居た。靈の心は靈のことに向つて微妙なる感じの力を持て居た。耶蘇の精神は神の精神と通じて居た。靈界に極めて微かな波でも動くときには、其は耶蘇の心に鮮かな印象を刻み付けずしては已まなかつた。丁度最も精密な寫眞器械の裡の原板には、一寸したる光も其の跡を映すと同じであつた。神の心が動くときには耶蘇の心は其に從つて動いた。自分の前に現はれた人を神が憐れむときには、其の心は耶蘇の靈の中に

動いて耶蘇は其人を憐れむだ。耶蘇と神と斯ういふ間柄であることは、時代の弟子等にも幾分知られて居た。彼等は其故耶蘇の行ふ所は神より命ぜられて行ふのである。耶蘇の言ふ所は神の心である、耶蘇の告ぐる所は神の心の眞の樣であると信じたのである。此れ耶蘇に對する歸依の原であつた。そこで此の病人も耶蘇に對しては矢張この心を持ち、滿腔の信頼を傾けて居たに相違ない。

然るに耶蘇は彼を見入て汝の罪赦さると言た。

此れは耶蘇が自ら人の罪を赦してやるのであるか、又は汝の罪は神から赦されるといふ告知であるか。何れにしても可い。これは事實の示しである。病人は之を聽て神の赦しを聞たのである。彼は神は赦し玉ふといふ眞理を心底まで示された。我罪赦されたりといふ自覺は忽然として入り來り、此の刹那に彼は世界の引くり覆つたやうな心持となつたに違ひないのである。他人は何と思はうが、彼は求めて居たものを得た。彼の心は飛び立つばかりに嬉しかつたであ

らう。もう其れで病も何もない。病の如きは治つても治らないでも彼の問題ではなかつた。彼は此の自覺を得れば其で萬事を得たのである。

七

勿論我が罪赦されたりといふ覺りは、之に事實を伴ふことを忘れてはならぬ。即ち罪を赦されて神の子供とされ、神との間少しの隔てがなくなつたと云ふのであるから、其には其だけの實が伴ふて居る。惡人が自分の意で尙惡をなしつづけ少しも其を悔いず、悔いても其があやふやであるならば、たとひ耶蘇が汝の罪赦されたりと言た所で、其は唯だ言葉であり、空吹く風の如く頭を通り越して、一向自ら赦されたとも神の子供とされたとも感ぜられるものではない。自分で罪を切に悔いて居る、肉慾に囚へられ、精神が自由に働かず、精神が肉の捕へを振り切て、清い意を行ふやうにならうとして悶えて居るけれども、其

が得られない、得られないのみならず、神の聖なる德を思へば自分の悔改は尙其の子供とせらるゝには不十分であり、自分の品性は尙汚れが全く淸まつて居らず、假に其が出來るにしても、過去何十年の間散々罪を犯して來て、神の心を傷め、神の國を毀ち、神の榮を汚して居る。其の結果として聖なる神と一つに合つて其の子供にされやうといふ道理はない。そこでどうしても我が罪赦されて神との間には薄紙ほどの隔もなく、調子のしつくり合た神の子であるといふ自覺は得られないのである。

然るに基督が子よ汝の罪赦さると告げ知らせた。天のことをそのまゝ知れる基督、神の心を其のまゝ有て行ふ基督が左樣いふのである。基督は神は天の父である、決して無情の裁判官のやうに、法律を以て人を一々定規に合はせて行くものでない、罪を改め心を飜へし、淸き愛なる神に向ひ、之を愛し、之と合はうとするならば、神は其を赦す、過去は問はぬ、たとひ諸〳〵の罪紅の如く

深からうとも神は全く罪を犯さなかつた者のやうに取り扱つて惠を與へ給ふ、汝は今信仰するから汝の罪今赦さると宣言したのである。されば此の罪の赦の宣言には、病人の心の變化が既に行はれかゝつて居ることを示して居る。病人の心の變化、其を見て基督は天の父が彼を赦すことを見、此の赦を示し、赦の自覺を病人に與へたのである。

此だけでも實に六かしい。基督ならずして誰が此の病人の深い要求を見て取る者があるか。基督ならずして誰が此の病人の神より赦されて居る眞理を明に覺るものがあるか。從つて基督ならずして誰が此の病人に力强く、病人が抵抗すること出來す、疑ふこと出來ざるまでに、神の赦を告げ得るものがあるか。病人を死地に陷つた心より天に救ひ上げる者があるか。他人が易いと思ふた事は六かしかつた。而して何人にも出來なかつた。其を基督が獨り能くしたのである。

然し其ばかりではない。此の病人にも基督は接したと同時に新しい生命を與へて居たであらう。病人は唯だ罪が赦されて神の子供とされたといふ自覺を得たばかりでなく、眞に基督の人格から新らしく神の子供たる德を注ぎ入れられたに違ひない。基督の眼の光、基督の吐く息、其等と共に神の子の德は病人に波の如く打ち寄せ、見えぬ所、靈と靈との關係で彼の中に打ち入て行き差しこむで行た事は確である。病人の人物は其所で變つた。今までになく、神を天父と信ずる信仰神の愛を信ずる信仰、自分は神の子供であるから、矢張神と同じ愛が靈の底に潛むで居る、其が活動かねばならぬといふやうな思、其等が一瞬時の間にでも攪き起され呼び醒まされた。彼は確に新しき生命の人となつたのである。

其の病人は兎に角としても、基督信徒は皆な斯うなるものである。即ち基督に接するに由り、其まで無いものが出來、其まで死で居たやうなものが生きた

ものとなる、即ち新しき生命の人となるのである。

茲が最も注意すべき所である。世の中に此ほど六かしいことはあるまい。病氣は醫者が治せるが、靈の腐つたものをば如何ともすることは出來ぬ。身體をも新らしく造り得る者はないが、まして人格をば新にし得るものはない。所が基督は其が出來る。此れ人の容易いとして居た所が、實は誰にも出來ぬ所であつて、基督の獨り能くした所だと言ふ所以である。

されば世の中で此の最も六かしいことが出來ぬと謂て嘆息し煩悶して居る人は基督に來れ。基督は其の一番の奥の所に手を下して、直ちに其所を整へて下さるのである。自分の罪があつて、神と合ひ其の子供となつたといふ自覺がなく、宗教上の恐と不安に蔽はれて居る靈は耶蘇に來れ。耶蘇は必ず之に覺りを與へ、目の開たやうに眞理を見て、安心し勇み喜ぶものとする。又道德上に於て自分の足りない所を嘆き、如何にしても肉慾から囚はれて居り、罪から脫

れ出ることの出來ぬことを悲むで居る人は耶蘇に來れ。耶蘇は其の人格より流れ出る德の力を以て、次第に其人の靈の中に注ぎ入れ、何時の間にか之を靈の緣までに充たして、全く淸い人格となし、前とは實際別人となつて居るを見出だせるのである。若し又自分の親なり子なり友人なり愛して居る者の人物について嘆くならば、或は嘆かずとも其が神の子供たる淸さ高さに達し、永遠に生くるものとなることを理想するならば。皆な基督に來れ。基督は其を一變して眞の神の子たるものとするのである。

八

以上は事の易い難いについて耶蘇の見方の他と違つて居る所であり、其の最も難い所を耶蘇が能くしたといふことを言たのであるが、第二に耶蘇の見方の他と異る所は物の後前と其の重い輕いとの點である。

人々は肉體のことを重しとし前にすべきことゝした、然し耶蘇は人格の變化を重しとし最も前にすべきことゝした。即ち人が宗敎上に神の子といふ自覺を得、道德上に神の子の品性を具ふることを一番のことゝしたのである。

病氣を癒したとて其が何程の事があるか。もし病氣が治つて身體が丈夫になつても、一生何もせず遊むで終るならば其は何の甲斐もなかつたではないか。心の卑しかつた者が矢張卑しいならば病氣の時と丈夫になつた後と其人に何の優劣があるか。否或人は病氣の時には、身體に障るため善も出來なかつたと共に惡も出來なかつたが、健康になつて惡を存分に行ふやうになりさへする。斯ういふ人なら肉體を救ふてやつて却つて其人を害し世の中を害したのである。萬事かくの如く、或は金を持たせて却つて其人を傷ふこともある。休暇を與へて却つて墮落させることがある。されば たとひ肉體を救ふても、眞に其の靈魂を救はないならば、益は殆どなくして却つて害のあることが多いのである。

然るに其の人格を救ふ、即ち其の靈を一變させると如何であるか。是は實に行き屆いた救である。もし此の一變が起つた上に身體が治るならば、其こそ虎に翼である。其の旺盛になつた精力は善のために傾け注がれる。喜ばしいものであらう。もし又其で富を得るならば如何、權力を得るならば如何。其は皆な清められ新らしくせられて用ゐられるのである。或は之に反して健康を失つても、又は金や權勢を失つても、人格が變つて神の子となつて居るならば、其等は殆ど悲むだり憂へたりするに足らぬことになる。否却つて其の不幸は益々人物を鍛ひ、或は錬達を生じ、希望を生ずるやうになる。されば人格に變化を與へるといふのが靈の救で、萬事の本である。

人格といふものは確に人の生活の中心であり又源である。萬事が之を軸として廻つて居る。人格が變れば萬事が變るのである。人格が變らねば何を如何に工夫しても駄目である。たとひ學問をさせても、或は行儀作法を仕こむでも、

底にある人格が美くしくなつて居なければ、所謂狒猴にして冠するもので、凡ての事が僞であり、眞逆の場合には生地が出ても來るし、或は却て其等の學問や地位を惡いことのために用ゐもする。

そこで基督は人格の變化といふことを根本のことゝし、之を重いことゝし、之を前にすべきことゝした。馬可傳二章の病人に對しても、周圍の分らずや達は肉體の癒しにばかり氣を取られて居たが、基督は其は後にすべきことゝして先づ人格に大變化を與ふべき途を取られた。基督が人に向つて勉むる所は此れである。人を自分に引き寄せて之を愛し、之に其の靈を注ぎかけて之を動かす、而して其の人の心の底から、罪を改め神に向ひ神に從ふの意志を呼び醒ます、其の意志が起つて來れば、天の父なる神は其でよしとし喜むで今までの罪を赦して之を抱き迎へて限りなき福を與へんと待ち構へて居ることを明に確に示し、斯くして人に我は神の子供であるといふ動かざる自覺を得させ、又

御自分の靈の感化に由つて新しき品性を造つてやる。此れが基督の活動で、是が即ち救である。人間の何よりも切に要するものは此れではないか。何よりも前にすべきは此れではないか。是さへあらば、他は何も無くても滿足すべきではないか。否此れさへ出來れば萬事が出來るのは當然ではないか。

九

基督教が用か不用か、迂遠なものか大切なものかは此で分るであらう。成程一寸見た所では信仰した所で何も目に見えた變化はない。信じても信じなくても同じである。然し基督教は斯く人格を變へるのである。若し人格の一轉といふことが萬事の本となり、從つて人の生活には最も深い關係のものだと分るならば、基督教は最も用のあるもので、最も我等の生命に響くもの、何よりも大切なものだといふことが覺られる。人格を變へる基督教は萬事をなすものである。

世の人は形の上の事を重しとし前として其にばかり心を奪はれ靈を顧みない。自分の子供に付てさへ、唯だ身體を健にし生活を豐にしてやらう、地位を得させてやらうといふやうな事ばかり思ふ。學問をさせるのも皆な其が爲にすると思ふて居る。然し其では佛造つて魂を入れぬのである。何故其の子供の中に基督の靈を吹きこまぬのであらうか。子供の內を基督の靈で湧き返つて居るものとし、子供の行を基督の靈の現はれて作用をするものとせぬのであらうか。此れ子供を救ふのである。子供を大磐石の人物とし、必ず世界に勝利を得させるのである。凡ての人に此の根本の救を與へねばならぬ。他のことを與へたとて之を忘れて居ては駄目である。我等の周圍には精神的の癱瘓患者が充ちて居る。物の不幸、靈の悲慘の中に沈むて居る。我等は直ちに其の中心に見入り、汝が罪赦されざるべからずと叫むで突貫せねばならぬ。

我等自身が基督を信じ全く基督に賴らねばならぬのは、實に基督が我等の萬

事の中心たる靈に向つて活動き、我等を上神に向つては罪が赦されて其の子供とされたといふ確な自覺に充たせ、我等自身の内には基督の新らしき生命を注ぎこみ給ふからである。我等は斯くして萬事を得たのである。我等の前には萬事が變つた。唯だ喜むで基督に頼り、新らしき生命を以て喜むで生き、新らしき生命を現はして清き行を以て世に立たねばならぬ。

救は天より

一

物の力といふものは永久も同じ分量のものであるとは、久しく人々の信じて居た所である。近頃は大分變つて物の力は必ずしも永久に同じ分量ではない、無くなつたり、出來たりするといふ説も出て來たやうであるが、其は何所まで確であるか我等は知らぬ。兎に角物の力といふものは何時も同じ分量であつて、其が色々形をかへて活動き、色々の現象を起して居るやうに思はれる。或學者は同じ力が動いて、電氣となり、磁氣となり、熱となり、光となり、色となつて居ると言て居る。其と共に百の力は百の作用をし十の力は十の作用をする。十の力は百の作用をすることが出來ぬのも事實である。天秤の一方の盤に

五貫の物が載かつて居るならば、他方の盤にまた五貫の物を較せなくては、杆は水平にはならぬ。百貫の物を動かすには百貫の物を動かすだけの力を持て行かなくてはならぬ。

此の道理は物の世界では、何所でも少しの間違ひもなく行はれて居る。星の世界に行て見ても、必ず行はれて居るに相違ないが、唯だ物の世界ばかりでなく、靈の世界にまで大分この理が這入て來て容赦もなく行はれて居る。我等が何か事をしても矢張實力だけしか出來ない。一升の釜は海の底でも一升。で實力さへあらば天下は與みし易い。勿論人によりては、或は貧乏であつたり、或は病氣であつたり、或は敵が邪魔したりして、實力あつても其だけの能用をせずに終るやうに見えるものもあるが、其は其の力が其の貧乏を凌ぐとか、病氣に堪へるとか、敵の邪魔を排けるとかに分けられるだけであつて、若し其人が働くならば、矢張出來るだけの事は出來るのである。之に反して若し實力の無

いものが、たとひ大いなる事をなした所で、其は一時を誤魔化し得るのみで、長い間には矢張綺麗に平均して仕舞て、馬は馬に鹿は鹿に歸つて行くのである。凡てこんな理は物の世界も靈の世界もよく似て居るので、兩方の世界は案外に近いと謂はなければならぬ。

然り。此は眞理である。所が世界が何所までも斯ういふばかりのものであるとすると、我等は全く失望して仕舞はなければならぬ理由がある。

二

世の中を見ると惡の勢力は滔々として漲り、眞に凄まじい有樣である。世界の全體を見ても胸が潰れるやうであるが、一々細かい所に立ち入て見ると一層呆れるのである。一寸見ると眞に穩かな美くしい薔薇の花の園のやうな所でも、いよいよ分け入て行くと刺がある。到底足の入れ場がない。惡の力は我等を壓

倒せんとして居る。其の勢や當るべからず。此は何人も認めずには居られぬ。之を見るときには善は如何にしても惡に勝てないと思はれる。一體初から對手になれぬ。惡の方は天下に滿ちて居るが善は實に微かなもので、稻麻竹葦と取り圍む雲霞の大軍の中に、僅の兵で守つて孤城落日の有樣であると同じく、實に心細さは限りがない。啻に戰つて勝つの望がないのみでなく、自分自身の命さへ保ち難い有樣である。然り實力を言はゞ到底勝てない。善が一であるとすれば、惡は千である萬である。惡を倒すには無限の力が要るのに、善の方には僅かしかない。

そこで終には失望し絶望して仕舞ふ。基督の譬の中に、若し王が戰を始めやうとする時には、先づ己が一萬の軍勢を以て、敵の二萬に敵し得るや否やを計つて見る、そして是れは敵はないと思ふならば、敵の軍勢の未だ城下に近づかざる時に、使を遣はして和睦を取り結ぶであらうとある如く、惡の勢に對して

は衆寡敵せず、初めから戰も開かないし、甚だしきは全く降參して仕舞ふ。此れは多くの人の陷り易い所である。もし實力以上の事が出來ないものだとしたら、當に斯くあるべきは勿論である。

其の果は如何いふ結果になるか。もう諦めて仕舞て惡に對して戰はうとせぬのである。何でも惡の蔓るに委せて置く。『葦原よ茂らば茂れ天が下、とても道ある世にしあらねば』とは、此の心持を歌ひ玉ふたものである。或は藤原藤房などのやうに、全く世を棄てゝ隱遁して仕舞ふものもある。甚だしきは屈原のやうに世を憤つて水に飛びこんで死ぬる者もある。或はセネカなどのやうに、尋常の手段では行けないからといつて、陰謀を以て天下を覆し、自分等の理想を行はうとする者もある。それほど能のない者は、もう何もせず一生を空虛にして終つて仕舞ふ。然しまだ其ならば善い。或は汨羅の漁夫のやうに、世は擧つて濁つて居るならば、汝も何故流に從つて波を揚げざるか、人が皆な醉ふて

居るならば、汝も何故粕を嘗め汁を啜つて甘しと言はざるかといふ風になる者もある。否決して其が少くない。斯くして其等は滔々たる世の中の調子に合はせて、人がするから己もするといふ風にして墮落して居る。特に東洋人はどういふものか此風が多い。惡に抵抗するに根氣がない。直樣降參して仕舞つて、自分が惡の奴隷となる。長い物には卷かれよなどいふ諺迄ある。何でも勢力のある所、景氣の善い所と見ると、蟻の甘きに就くやうに蝟り集つて、弱い者をば多勢でいぢめ殺して仕舞ふ。甚だしきは強い者の意を迎合して、何か其の貪りの心を滿足させてやつて、其で氣に入らうとしたり、強い者が睨んで居るものがあると、逸早くのしかゝつて押し潰さうとして、却つて笑止千萬の見苦しい體以爲を仕出來すものも少くない。日本や支那では力さへ作らば世の中は何所に行ても木戸御免で、どんな不義不道を行はうが咎めるものはないのである。強い者と弱い者と爭ふことがあると、弱い方に向つて、君は弱いのだから負け

て居るべき筈だといふ。いくら強い者のすることでも惡だから扞がなくてはならぬ、いくら弱い者のすることでも善だから助けなければならぬなどいふ觀念は、まだ餘程幼稚である。

基督教會の內は全く變つて居る筈だが、如何にせん幾千年來かういふ氣質で存らへて來た國民、矢張萬事が宿命主義であり事大根性に支配せられて居る。景氣さへ善い所なら、中にどんな不都合な事があつても趨せ集つて行く。勢力を占めて居る人なら、どんな品性の人物でも喜んで從つて居る。其が一たび呪ひを宣言したら、たとひ私情私慾から出たといふ事が明々白々であつても、咒はれたる者は息の根を止められて仕舞ふ。基督教の或團體の理事の人々は屢々喞つて居る。我々の會は西洋では會員が本で、自治の主義であるから、地方地方で會が各々獨立し、其が唯だ聯合して居るといふだけであるが、どうも日本では左樣やつて居られぬ、矢張中央の本部といふものがあつて、其が他を支配

し命令して行かなくては善く行かないやうだと。私は其を聞く毎に、そんな事ではいけない、日本人の性質で其が一通りで甘く行けないなら、一層骨を折て甘く行かせて、せめて基督信徒だけでも、自治を重んずる人民としたら如何かと論ずるのであるが、兎に角日本人は強い者の前には頭の上らぬものゝやうである。

凡て斯ういふ事實は、物事は自分の力だけしか出來ないといふ道理を知つて居ろから、知らず〳〵弱い自分は強い者には負けて居なくてはならぬといふ風になつたからである。然り、物事が實力だけしか出來ないことが何所までも眞理ならば、左樣なるも致し方がないのである。

三

實力だけより外は能は出來ないとするならば、社會の事は今言たやうに、進

むことも改良ることもなくして、唯だもう滯つて腐れて、人間も極めて卑屈な陰險な下劣なものとなつて仕舞ふが、然し唯だ其ばかりでなく、一人の精神の中にも進むとか善くなるとかいふことは無いことになる。倫理學者がよく品性決定といふことを言ふ。曰く、人間といふ者は、善くなり惡くなるのは、自分の靈より以外の力で支配せられて、善くなるとか惡くなるとかを定められて居る者ではない、自然の力は人間の靈の向き方を定める事は出來ぬ。たとひ身體がどんなに生れ着いて居やうが、又身の周圍の事がどんな風になつて居やうが、其で人間は必ず善にならなければならぬとか、必ず惡にならなければならぬとかいふものでない。又神が人間の一人一人を前以て善くなるやうにとか惡くなるやうにとか定めてある筈もない。人間は唯だ自分の意の向けやう一つで善にもなり惡にもなる。此れが意志の自由といふものである。が然し其の意の向き方は、其の本人の靈の立派なのと汚いのとに由て分れ、善人ならば善い方に心

が向ひ、惡人ならば惡い方に心が向ふ。其でつまり人間は自分の靈に有るだけのものにしかなれぬ。種子は木になる、蕾は花になる、然し粟の種子は米にはなれぬ、桃の蕾は櫻にはなれぬ。此れが品性決定といふことである。

成程これも至極道理のあることで、人はみな自分の品性より上には昇ることは出來ず、品性の中にないことなら、倒にしても出て來ないのである。然しさうして見ると、前に言た所の、物は力だけしか出來ぬといふ道理から考へて、我等の一人一人も此れは大いに困つたもので、また失望落膽の外はないことになる。

といふのは我等は自分の品性は左ほど立派なものでないといふことを思ふ。自分の靈の中には、今は言ふまでもなく、此後いつまで立た所が、聖く高く又愛に充つる人となるやうな種子も蕾も有りさうには考へられぬ。父母を考へて見、先祖を考へて見ても、中には一通りの學者もあつた、又政治家もあつた。

然し其等の品性といふものがどれ程高かつたか。殆ど言ふほどの者はない。さうして見ると、自分の中に何も自分を立派にするやうな力は無いのである。否否其ならまだよいが、自分の中には却つて惡の方が勝て居る。成程一點の高い志もあるが、其は肉の慾の力のために壓し倒されて居る。自分の心の中では高い志が働かずして、其の肉の慾の方が働いて自分々動かして居る。此はバウロのやうな大人物でも感じたのであるから、自分には最も甚だしく現はれて居る。詩篇の第五十一に在るやうに、我母罪の裡に我れを妊娠みぬと思はれるほど、自分の品性は罪で作り上げられて居るかの如く感ぜられることもある。それで我等はもう聖なる人物となるなどいふ望はないとせざるを得ぬ。何となれば力はいつも平均する、十の所まで上るには其だけの力が無くてはならぬのに、我等には惡のみあつて善が更に無いからである。よしや多少はあつても、底を叩いて居る、到底高い所に上るだけのものはない。

斯う考へて來ると、我等はもう奮發の氣力もなくなる。闘はんとする志も失せて仕舞ふ。まゝよどうでも成るが善いと云ふ氣になつて、極めて意氣地のない、墮落した生活に陷つて仕舞はざるを得ぬ。多くの人々はみな曾て闘つた、然し外の敵心の中の敵は甚だ強くして、到底もう自分の微力で如何ともすることの出來るものでないといふ事を覺つて、諦めて仕舞つて、敵に降參したものどもである。

それで人間が若し自分の持て居る力に相應した事だけしか出來ぬとしたら、もう失望の外は無く、其の結果、改革とか進歩とかいふやうな事は全く無くなり、一人は墮落し、社會は腐敗して仕舞ふのである。

四

所が不思議の不思議とも謂ふべき事には、人間は力よりもずつと以上のこと

が出來て居る。否々まるで力と比べられぬほど大いなる事を仕出來して居る。先づ一人に就て見ると、人は實に思ひも初めぬ高き所に上つて居る。初め品性の何所を叩いても、影も見えぬ立派なものが、何時の間にかちやんと出來て、其の人を全く見違える人物として居る。基督の信者の一人一人を捕へて其の素性を調べて見ると、みな其である。信者の人は動もすると未信者を侮るやうな惡い癖がある。其で自分の友人とか、親族とか、甚だしきは兄弟さへ、親さへ、どうも彼等は思想が低く、物の理が分らず、困つたものである、基督教を聽かせた所が、到底信仰は出來やしないと考へて居る。併し此れほど基督の精神に反いた思想はなく、又是ほど自分を知らず、人を知らぬ思想はない。さういふ人は自ら心に省みるが善い。自分自身は如何なるものであつたかと。自分も矢張さういふ友人親族と同じやうな人間であつたのではないか。私は時々之を感じて何とも言へぬ心持になることがある。私の鄕里の友人や又親類等の中など

には、基督教を信仰して居ない者も多い。時には彼等の思想や生活について悲みもし憤りもする。然し彼等は自分と同じ血を承けて居り、或は同じ調子の社會で育つたものである。自分も若し基督教を信じなかつたならば、矢張あの通りであるに相違ない。之を思へば神の自分に對する惠は實に感謝に餘りがあるが、其と共に自分でさへ斯く變つたならば、自分と同じやうな彼等とても變らぬ筈はない、之を見縊つて傳道もせぬといふ人の氣が知れないと思ふ。否彼等の中には、自分等よりも數段立派な人物も決して少くはないのであるから、必ず非常なる發達を遂げるに違ひないと思ふ。斯ういふ風に、基督信者が今舊い友人や親族などを見れば、自分とは何もかも全く異つて居る人物等のやうに感ずるが、然し自分が曾ては其の通りの人であつたのである。それで自分は全く變つて、昔とは似もつかぬ人間になつて居るのであるといふことが分る。確に自分の昔の品性の中には、倒にして振て見ても今持つて居るやうな思想はなか

つたのであつた。さうして見ると、我等は自分の力よりもずつと〳〵大いなることをしたのである。自分の力では到底も出來なかつた、高い未來を作つたのである。

社會の事がまた其である。人間の力ではもう出來るだけの事は仕盡した。もう行き詰つて仕舞つた。十の力は十の事だけしか出來ないならば、此上には如何もなり樣がない、然かのみならず惡の力の方が强くして、寡は衆に敵しない道理からいふと、善は押し着けられて仕舞つて、世界は全く墮落して生命が無くなるべきであるのに、其の微かな善の力がまた勢を得て、火の燃えるやうになつて世の中を化へて行き、また大分美くしい時代を造るやうになる。人間は確に力以上の大いなる事をして居る。

此れで我等は望を持つことが出來、樂むで居ることが出來る。もし力に相應した事より以上には何も出來ないとしたら、微力な人間、とても何も出來たも

のではない。唯だ他の力のまゝになつて、長い物に卷かれて行くより外に仕方がない。其では實に望のない、悲しい至りではあるまいか。

五

之はどういふ理由からであらうか。茲をベルグソンの哲學を適用めて考へるならば、人間の先祖代々蓄へて來た力でもつて、新しく高い所に上つたのだと言はれるかも知れぬ。生きたものは流れのやうになつて進む。萬年前千年前から、昨日まで、今日まで蓄へた力が、皆一緒になつて明日を造り出すには相違ない。然し何故其の明日は今日までの總計よりも多くなるのであらうか。今日までゝ億萬になつて居るものが、何故明日は億萬と一となるのであらうか。其の一は何處からか拾つて來ないで、宇宙の内にも外にも全く無かつたものがどうして出來るのであらうか。

或は人間が明日は今日より高くなるのは、本人の品性の中には高いものが無かつたにしても、潜在意識の作用でなるのであると說き明すことも出來る。即ち本人は極めて低い品性の者であるが、其の靈は常住自分の知らない所で、他の人の靈の活動に觸れて居る。そこで自分より偉い人物の靈の活動が、見えない間に自分の靈の裾に來て之を動かして、何時の間にか自分の知らない所に其の偉い人の心が這入て居る。いよ〳〵其が自分の靈の奥の方まで這入て來ると、其所に人物の變化が起つて、初の内思ひもそめぬ高い思想を持ち大いなる能力を持た人物になるのである。斯う說き明すことも出來やう。左樣いふ道理は大いに有るのである。然し其にしても矢張分らない。何故かと言へば、人は今までに如何なる大人物も曾て思はなかつた高い事を思ひ、今まで持たなかつた大きい力を持つやうになることがある。それがあるから世の中が始終進むので、唯だ他の人から潜在意識に受けただけしか持たないものなら、何萬年たつても

矢張同じ高さの所を行きつ戻りつして居なければならぬ筈であらう。

六

そこで人間の一人が惡の力罪の力に勝て、舊い品性から脱け出て、非常に高いものとなり、又人間の社會が滔々たる惡の勢力充つるにも拘はらず、微かなる善の力を以て、よく之を壓倒して前よりは非常に高い段に上るといふのは、是は天よりの力、神の力によると確信せざるを得ないのである。オイケンはいつも靈の生命は人間の内に在るばかりでなく外にもある。若し内にばかり在るものなら、人間に新しい生命といふものゝ起らう筈がないと言て居るが、一人でも社會でも、舊い有樣から全く異つた高い有樣に移るのは、天から生命が新らしく這入るからであると謂はざるを得ない。

眞に我等の世界は、此の僅に四五十日位で一周される狹い目に見える所ばか

りではない。我等の居る所は天に連つて居る。人間の生命は山の上の小さな池を見たやうなものでなく、入海のやうなものである。池は旱が續くと涸れるが、入海は如何なる大旱魃にも一寸だに水が減ることがない。潮の干た時は底も出るやうになつて居るが、一旦潮が滿つると大船も浮き上る。人の力は微で小舟をも浮ばすことが出來ないが、一たび神の力が無限の天より差し入て來ると、實に大いなる工をするのである。一人が生れ更り社會が改まるのは、我等を取り卷て居る無限の靈界から、神が入り來つて働くからである。そこでとても自然では出來ぬことが出來る。人の持て居る力は一しかないのに、百の事、千の事は愚、殆ど測るべからざることが出來る。

七

猶太人は先祖代々神を信ずることの篤い人民であつた。彼等は神は先祖アブ

ラハムと立てた契約を忘れ玉はず、必ず猶太人を惠み、榮えさせ玉ふと確信して居た。然し國の實際は榮えるどころでなく、日に〳〵衰へて行て、基督の前には羅馬に取られ、羅馬から壓へられ、羅馬人の眞に巧なる政治、眞に堅固な支配でもつて、鐵拐で締め着けられたやうになり、もう其から脱け出るやうな望は、微かにも見えないやうになつた。いくら足掻いても駄目であつた。人民の中からは度々我こそ『メシア』だと稱へて、自暴自棄に此の軛を叩き壞さうとする者が起り、少しは騷ぎも起したけれど、何にせよ對手は羅馬である。唯だ一耐りもなく打ち破られて跡方もなく亡びて仕舞つた。猶太人は此世からは救の來る望を失つて仕舞つたのである。

彼等は確に失望した。否絶望した。其の時代に書かれた文學は、みな此の悲み極まる色を帶び、絶望で徹底して居る。然しそこが流石は猶太人、流石は世界に於ける無二の宗教的天才の國民、流石は信仰の強く確な子等である。彼等

は左樣なつても尙神の救の來るといふ信仰を棄てない。此世の地平線上には救の望は全く絶えたが、然し彼等は上を仰いだ。救は天より來ると信じた。彼等は『メシア』即ち救主は空から雲に乘つて降つて來て、世界を審判し、敵を亡ぼしイスラエル人を引き上げ、大いなる繁榮を得さすると思ふて待ち焦れた。

彼等の思想は大分誤つて居たであらう。人民の多くは餘りに目に見える事ばかりを考へて、精神の事が分らなかつたのであるが、然し其の望の根本にある精神には感心な所がある。彼等は救は天より來るとしたのである。確に世界を救ひ、一人を救ふ救は、決して此世の地平線からは現はるべきものでない。天より全く新らしく、降り來つて此の世界に入り、茲で活動をするのである。

八

果して救は天より來た。ベツレヘムに生れた一個の嬰兒は、此の救を天から

地に引き入れた人格である。然し猶太人は天からの救を望みつゝ實は地をばかり見て居た。或者はダビデ王の系圖を一心に睨んで居た。或者は朝立つ雲夕立つ雲を見入つて、其所に世の末の奇しき輝きが現はれはせぬかと探して居た。然し天よりの『メシア』は彼等の背後から來た。靈の世界から來て、大工の子の人格となつた。あゝ大工の子、其の此世で持た力はどれ程であらう。然し彼の背後には無限の聖の力の海がある。此の無限の海の力は、三月の大潮よりも旺に、人の世界に注ぎこんで來たのである。

實に耶蘇の人格の現はれたといふことが、人間の歴史の最も大いなる觀物であり、又不思議である。耶蘇の一代を調べて見ると、極めて小さい村の大工の子で、誰が研究して見ても、當時の猶太教々師『ラビ』等の學校に入た跡もない。其に世界を引くりかへして、死だ人類を生かすといふ大いなる活動をした。耶蘇の人格を見ると、其の大きい事、美はしいこと比ぶべきものがない。私は

時々質問を受けることがある。即ち聖書の中には基督の行ひ玉ふた事、出遭つたことは、一々舊約の預言に合ふと書いてあるが、實際基督の事は何から何まで早くから預言されて居たのであるかといふ問である。私は左樣でないと答へる。成程新約全書には左樣書いてある所が多いが、其は基督の弟子等が基督は早くから世に來ると言はれて居た『メシア』に相違ないといふことを人々に說くため、一々舊約を引たものであつて、其の引た言は大抵原の意味と違つて居て、無理に引きつけたやうになつて居る。實は基督のことは舊約には一も預言してない。申命記に在る預言者のことでも、以賽亞書に在るエホバの僕の事でも、乃至但以耳書に在る人の子の事でも、其は基督の事を言たのではない。斯ういふと或る人々は大變不信仰のやうに思ふかも知らぬが、實は私は基督を崇むる心が切なために左樣考へるのである。一體舊約の預言者などが、如何に高い思想を抱かうが、到底實際に現はれたやうな基督を想ふことは出來るもので

ない。基督は彼等が足を爪立てゝ考へたよりも、ずつと〳〵とても比べることの出來ぬ高い人物であつたのである。イスラエル人は先祖アブラハムより神を念ひ、後には代々救主を望むで來たが、耶蘇基督は彼等の積み蓄へた高さよりも、ずつと脱けた高い人物として現はれた。然り、神は天より全く新らしい力を注いで、第二のアダムの人格を起したのである。

九

そこで人の救といふことが成就する。若しも此の天よりの人格が現はれなかつたならば、世は永へに暗である。猶太人の運命の哀れであつたことも變りのないと共に、人類の靈の生命は終に救はれることが出來なかつたのである。舊い猶太の精神、舊い羅馬の精神は、人の靈を千筋萬筋の繩の如く搦めて、人の靈の生命を取り殺して仕舞つたであらう。歴史を知るものは、若し左樣であ

つたら世界は如何になつたかと思ふて、覺えず震ひ戰くであらう。又此の天よりの救が來なかつたならば、一人の靈は自分の微なる力では何をもなす事が出來ず、自然の力を振り拂ひ、肉慾の捉へを脱け出ることが出來ず、永へに其の下に支配せられて、墮落の生涯、罪の生涯を續け、神を離れた暗黑の中に悶え、不幸きはまる有樣であるであらう。

然るに救は天より來た。人間の世界からは、どの隅々まで獵つて集めても得られぬものが現はれ、人間の力では逆立ちしても出來ぬことが出來、今までは人間の世界に一ほどより外なかつた力が、千になり萬になり無量になつて、新しい事が出來るやうになつた。耶蘇基督の人格は預言者も想像さへ出來なかつたもの。其が此の人間の中から現はれた。其がために人間の理想といふものが無限に高くなつた。基督の人格は我等の仰いで其に行き着くべきものであるといふことが切に思はれるやうになつた。此だけでも人間世界に大變な變化であ

る。人間の思想といふものが以前とはまるで段違ひとなつたのであるし、思想が違へば、當然實際が違つて來て、思想のやうになつて行く。然し其ばかりでなく、基督が現はれて、此世で活動かれた爲に、基督を信ずる人間は皆な其の新しく持て來た生命を注ぎこまれて、自分等も新しい生命の人となる。以前は神を知らなかつた。知ても極めて小さいつまらない汚ない心の神であつた。然し今度自分の心に信ぜられ、仰がれ、全心全靈を以て慕はれて居る神は、無限の聖なる天の父であるやうになつた。今は此の天父の靈が自分の靈の内に在る。少くとも此の天父を思ふ思ひが自分の内に在る。大變な變化ではないか。其から自分自身は神の子であることを知て、天地の間に謙つて生きても行くし、又非常に安心もし、自ら尊むでも生きて行くやうになつた。是また以前の自分の行き途と比べたら靈泥の差があるであらう。其から自分の靈の中には人を心から愛する心も出來た。以前は却々そんな心は起らなかつたが、今は確に在る。

時としては火の燃ゆるが如くになる。其外色々の變つた實がある。一人一人が變れば社會も勿論變る。人間の力では變らうやうもない變化が、基督の來たために世界に起つた。猶太の世界、希臘羅馬の世界は一變して仕舞つた。停つて居た人類の精神は、新しく高い段に上つて、非常な勢で進み出した。今日でも基督が入て來ると、其の社會は忽ち泡立つて直に變化を始めるのである。

救は天より來た。人間は新しい望が出來た。天下は動かすことが出來る。我等は基督の顯現を思ふて、

『至高所には神に榮光、地には神の心に適へる人に平和』

と叫ばざるを得ない。

十

我等は聖誕の思想に於て、斯く感謝と歡喜に溢れることを覺えるが、最後に

此の説教の主眼となつて居る方面のことを實際の事に適用て考へて置きたいと思ふ。救は天より來るのである。人生には人のしない事で神のする事が甚だ多い。人には能はざる所なれど神は能はざる所なしとは、誰か救を受くべきやといふ問に對し基督が答へ玉ふた言である（馬太傳十九ノ二六）。人は一の工しかしないで居るのを、神は千にし萬にする。馬太傳十七章十四節以下に、基督の弟子等が、主の不在中非常に惡性の癲癇病人をつれて來られて其を治してやれなかつたため責められて居たのを、基督が山から下りて來て一言の下に治してやつた。そこで弟子等は我等が治すことの出來なかつたのは何故であるかと問ふと、基督は答へて汝等信なきが故なり、我れ誠に汝等に告げん、芥種の如き信あらば、此の山に此處より彼處へ移れといふとも必す移らんと答へ玉ふた。芥種ほどのものが大結果を生ずるのである。此所が信仰の餘地である。此の芥種ほどの信あらば山をも移すといふ言は、度々説教に引かれる所であるが、唯だ信せよ信

せよといふ助として用ゐられる事が多い。然し小さなものが大結果を生む事實があるから、此の事實を信じて、確に小さいものが大いなる事をなし得ると固く信じて事をなすべきである。

そこで我等は世の中に付て決して失望するを要せぬ。我等の前には戰ふべき敵は雲霞の如く取り圍んで居る。我が教會の力は、用かせた所で、車一杯の薪の火事に杯の水をかける位のやうに思はれる。併し我等の背後には天が在る、神が在る。此の世界を改め、之を救ふことが實際に出來ることを信じて戰はねばならぬ。又我等は決して他人に就て失望してはならぬ。たとひ其の人の品性低くして罪の力如何に恐ろしく支配して居り、我が力を以てしては之を善の方に一分一釐も移す事が出來ぬと思はれても、我等は尙其の人のために祈り盡すべきである。我等は何をなすの力もないが、神は凡てをなし得るのである。我等は又自分自身に就て失望してはならぬ。たとひ我が靈の中に惡の力如何に强

く、我が品性如何に紅の如く汚れて居て、我が善の力は全く無いに等しくとも、決して悲むことはいらぬ。天には神がある。基督に依て天より新しい生命を注ぎ入れて、我等の靈の內を變へ、之を引くりかへし、死だものを生かすのである。我等は地より救を見出ださず、地には全く望を絶てもよろしい。天がある。生命が溢れて居る。此所より救を仰ぐべきである。聖誕節は天の生命が地に入た紀元である。我等は之を祝し、之を感謝し、我等の內に此の生命を注ぎ入れられなくてはならぬ。

生活の目標

一

基督信者の心の中に、始終住むで居るべき思想は何であらうか。喜び悲み胸に往きかひ、義を慕ふ心、罪を恐るゝ情、人を愛する意、神を信ずる志いつも生きて動き、絶えず回り廻つて居るが、其等の雜多なる思ひや願ひの中に、いつでも現はれて居り、其の根本のものとなつて居るものがある。其は唯だ一の耶蘇基督を念ふ心である。此心基督教の生活の活ける泉であつて、是より萬端のことが流れ出で活動をして居る。

近代の世界の神學思想の牛耳を握つて居るリッチュル派は、基督に歸れといふを其の警語として天下を動かした。勿論リッチュル派の初め基督に歸へれと

唱へた意味は、基督教の信仰の中には色々な思想が他から這入りこむで來て居る、希臘の哲學の中に在た思想や、猶太教の中の思想が、基督教の信仰の中に滲みこむで居て、基督信徒は代々其を基督教だと思ひ、其を信じなくてはならぬかと思ふて居るから、大變そこに信仰が六かしくなつて居る、然し基督教といふものはそんな七面倒なものではない、そんな雜り物を一切除けて仕舞つて、正直正銘の基督教に立ち歸ると、實に淸いものであり單純なものであり又誰にでも信ぜられるものである、其の正直正銘の基督教は、ナザレの耶蘇の教と、其の本人とを信ずる信仰であると言ふに在た。

リッチュル派の初に唱へた所は、少しく偏つて居た。そこで後の學者は其の思想を幾分變へたのであるが、基督を本としなければならぬといふことは益々考へられ、實際基督信徒は萬事基督を本として生きて居り動いて居るのである。我等はどうしても基督に歸り、基督に呑まれて居なくてはならぬ。

二

然し基督に歸れといつた所で、唯だ千九百年前に在た基督の事を考へ、其の基督の思ふた所を思ひ、其の基督の行つたやうに行ふといふばかりでは、其は六かしい事でもあり、又生命も力も無い事である。基督教は曾て此世に存へて三年程活動いた耶蘇基督の人物と教とに現はれた所を信ずるばかりで、外には何もないとは言へぬ。そこで今日の力ある學者たちは何れも、基督の人物の力といふものは僅か三年ばかりの生涯の事に皆な現はれる筈はない、耶蘇の弟子等が師に接して其の靈に受けた變化は、即ち基督の人物の力の作用であるから、弟子等の其の後の思想や行爲は、つまり鏡に映つた耶蘇の影を見たやうなものである、それで弟子等の宗教も基督教である、其のみならず其後の代々の人々の現はして居る宗教も、矢張耶蘇の人物の現はれた姿であるから、基督教

として見ねばならぬと考へて居る。基督はいつまでも生きて居て何時の世の信徒にも其の靈の清き力を注ぎ入れ、信徒に立派な生活をさせて居るのであるから、基督を本とせよといふのも、此の今日生きて居る基督を本として行かなければならぬのである。

其にしても基督に歸れとか、基督を本とするとかいふのには色々の意味が在るのである。或は基督の敎を守るといふことを以て基督に歸る所以だと思ふ人も少くない。此れは至極道理な話である。いくら口や頭ばかりで基督信者だと言た所で、其の行が出來て居らぬならば、基督の徒であるとは謂へぬことは言ふまでもない。約翰第一書四の二十にある通り、若し我は神を愛すと言て其の兄弟を憎む者は是れ謊者である。基督も我を呼びて主よ〳〵と言ふ者天國に入るにあらず、天國に入るものは天に在す父の御心に遵ふ者のみなりと言はれて居る（馬太傳七）。基督が本當に其人の中に生き、基督敎が本當に其人の生活

となつて居らば、行は必ず神の旨に從ふ行であるに相違ない。然しながら基督に從ふといふことを、唯だ其の命令や敎訓を外の行で守つて行くといふ風に思はゞ大なる誤りである。聖書の中に斯ういふ句があるから、其の通りに行はねばならぬ、基督が斯ういふ風に行はれたから、そつくり其のまゝの形で倣はねばならぬといふやうに思ふのは、其は矢張一種のパリサイ主義である。品性も其では決して善くならぬ、却つて僞善になつて仕舞ふ。たとひ其で基督の通りな行が出來るにせよ、基督に歸つたものではない。何となれば其は造花を見たやうなもので、如何に巧に出來て居ても生命がない、內から發したものでない。其で歸つたのは唯だ基督の言葉に歸つたのである。

此の種のパリサイ主義は隨分敎會の中に滲み込むで居る。基督の言や新約聖書の命令を形のまゝに守らねばならぬとして、精神を忘れた窮屈の生活をするはまだしも、多くの基督信徒は舊約聖書を新約同等のものと思ひ、舊約聖書の

誡を一々其のまゝに活かせて行かうとし、甚だしきは基督の精神に外れた事でも、舊約の中に敎へてあるから行つて差支ないとまで思つて居る。然しそんな事をする位なら、儒敎などの方が餘程實際に適合つて善いのである。基督に歸るといふのはそんな生命のない事ではない。

或人は又基督を神であるとして、只管かしこみ畏れ、又讃美して行くことが基督に歸り、基督を本とすることだと考へる。此れも眞に尊い思想である。リッチュル派の學者カフタンといふ人も、基督敎の骨髓は基督を神として居ることだと言て居る。ブラウンも古から基督信徒が基督敎の一番の眼目中心として來た事は、基督は何よりも尊い者だといふことであつたと言て居る。確に基督は神であるし、基督を神として拜むでこそ諸〳〵の祝福が得られるのである。然しながら唯だ神として崇めた所で、其は即ち基督を主よ主よと呼ぶのみのもので、矢張價は無いのである。そんな贋負の引き倒しには基督も困り給ふであ

らう。

唯だ基督を神として崇むるのは却つて大いなる害がある。基督を崇むれば崇むるほど基督と遠ざかつて仕舞ふ。一體單純な崇拜といふものは、拜む者と拜まれる者とを遠くするのである。人間は拜む者を自分より遠く押しやる者。山を拜めば靈山として足を踏みこまれぬ所とし、木を拜めば神木として標繩を張り觸るべからざるものにする。猶太人はエホバを崇むることが愈よ强くなつて、エホバを遠きに置くことが愈よ加はつた。彼等はエホバを天の心深く祭り上げて仕舞つて其名を呼ぶことさへ恐れ、終には名を忘れて仕舞つたが、其だけエホバは自分等と關係の遠いものとなり、毎日の生活にエホバの助を受けるとか、エホバの靈に淸められるとかいふ信仰は更に無くなつた。從つて其の事實は尙更無くなつた。矢張今日基督を崇めまつつて居るのみのものは、成程信仰は堅いやうだし、其の基督に對する態度は殊勝なやうだが、事實に於ては基督

を距ること遠く、基督が其人と共に在るらしい所は少しもなく、基督の感化をば全く受けて居らぬやうである。唯だ基督を崇め拜むといふことが基督に歸る所以ではない。

三

然るに基督信徒の間には以上のやうな風に基督に歸り基督を本として居る者が少くないので、今日の信徒の生活には隨分著しい缺點が暴はれて居る。其は色々ある。品性も甚だ感服の出來ぬ所が多く、心にも喜とか平和とかいふ祝福が乏しく、他の人に對しては善の力が働かない。が今之を或る方面から分類して見ると、一方には道德の甚だ低くて一切構はない者と、他方には道德の煩悶者とになる。道德を構はない者となるのは當然の事。基督を崇めさへすれば其が基督を本とした事であり、基督信者の本分を盡した事と思ふのだから、

他人を傷めやうが平氣なのに由るのである。隨分斯ういふものが敎會の中に多い。甚だしきは基督を笠にきて他人を虐め殺す者もある。神の名を未信者の間に汚す者は此等である。若し此等が其の誤りを覺り、本當の基督信者になるならば、今の敎會は全く生れ更つたやうになり、內には愛が溢れ外には世界を救ふ力に振ふであらう。

道德の上の煩悶者に至ては最も憐むべきものであるが、此れは唯だ基督の敎を守らう行はうとする所から終に此の苦みを有つに至つた者である。私は屢々斯ういふ煩悶者に出遭ふ。其等の人は言ふ、自分は信者になつて既に幾年を經た、然し一向立派な者になれぬ、自分の意志は甚だ弱くして、幾年立つても同じことを繰り返し、すまいと思ふことをする、どうしても其が改まらない、十年前にあつた缺點が今も依然としてある。どうしたら之を矯めることが出來やうかと、斯んなことである。此れもさもあるべきことである。

然し是等は事實基督を本として居らぬから起つて居る禍である。基督を本として生きて行くならば、決して此等の弊もなく、非常なる祝福を享けるのである。

四

然らば基督を本として生くるとは如何なることであるか。基督を外から學ぶのでなく、基督を天に祭り上げるのでなく、基督を自分の靈の中に宿すことであり、基督と一心同體となることである。約翰傳十五章には、基督は葡萄の樹の如く、基督信徒は其の枝を見たやうなものであるとある。基督と我等と斯ういふ關係になるのが基督を本とする事である。基督の精神の中の盛んな力清き生命が枝葉たる我等の中に流れ入り、針の尖より細かき血管の末にも、蜘蛛の糸の何十分の一ほどな神經の端にも、其所に基督が生きて居る、斯ういふやうな生

き方である。パウロは又之を譬へて、接芽はもと台木とは異つた木である、然し其が接がれると初の内は異つた木のまゝであるが、やがて一つに着き、台木の生命は其のまゝ接芽の生命となり、根から營養を取つては其を芽まで送り、芽は生ひ立て榮え、花を開き實を結ぶ、我等は基督に接芽されるのである、素は異つた者だが一つの者となると言ひ、若し我等彼の死と様の同じきに由て接合ひたらんには、また其の復活と様の同じきに由て接合ふべしと言た（羅馬書六ノ五）。我は我、基督は基督であるが心は通ふて居る、基督の心が我が精神の土臺の下に一杯に充ちて、基督の思ふことが我が思ふ事となり、我が思ふこと又基督の埒を超えずといふ風になれば、此れもはや基督の生命と同じ生命となつたのである。左様なつた時には、無論道德はどうでも構はぬ、人を蹂躙しやうが平氣の平座であるなどいふことは出來ぬ。あれほど人を愛し、あれほど人に事へた基督が我等の衷にあれば、我等も基督と共に人を勞はり、人を幸にし、人のため

に自らを役するを喜ぶものとなるし、又其の行ふ所の美はしい行は、外から自分の刻苦鍛練で飾りつけた花でなく、内にある基督の生命から、自然に咲いたものであるから、生きて居り、榮光がある。道德上の煩悶者等は、自分の品性を起ちては眺め居ては見戍り、庭師の植木を造るために、あの枝を剪り此の枝を抂げるが如く、細工を施しては嘆息するけれども、一向其の甲斐の現はれぬを悲むが、然し基督をかく本として生きるならば、其ほど苦心しない内に自分の缺點や弱點を取り去られて仕舞ふ。其は其の筈である、基督の生命が底から這入て來て自分の衷に充つるのだからである。品性が知らぬ間に變つて仕舞ふ。品性が變つて來れば、善き樹は善き果を結ぶ理、其から現はれ出る行が惡からう筈はない。

我等はどうしても基督の生命と一の生命とならなくてはいけない。

五

然し其は非常に六かしい事ではあるまいか。其は結構なことであつて、左樣いふ境に達した人は、自ら實に言ふべからざる悅びを有ち、他の見る目も羨ましいが、實に至て少數の人の得られる幸のやうに見える。普通の人は中々そんな深奥いことを考へる力がなく、從つて其を得ることは出來ぬであらう。斯く思ふ人もある。が其は又間違ひで、其は決して得られぬものでもない。唯だ其の途を思ひ附かないから、得ることが出來ずに居るのである。然らば其の途は如何なることか。之も色々あるであらう。然し誰にでも出來ることで、而して其の効の尤も著しく、而して最も大切なる途を一つ考へて見たい。

其は外でも無い。即ち耶蘇基督を仰いで一途に之を念ずることである。抑も人の或事を念ずる力といふは非常に大いなる作用のあるものである。念ずると

いふと人は直ちに之を一通りの思想のやうに考へるかも知れぬが、念ずるといふは一途に思ふのである。自分の意志を對ふの物まで屆かすのである。近頃我國でも心理學者が連りに寫眞念射といふ試驗を行つて居る。寫眞の原板を包の中に入れたまゝ、念射の出來る人物をして、其の心の力で何か字なり畫なり、念じこませる、さうすると原板の上には極めて鮮に其の形が寫つて居るといふのである。色々疑つたり惡計をしたりして之を否定した人もあるけれど、私はこんなことは世界の學者の試驗と比べて見て、必ず出來ることだと信じて居る。西洋では人の念力のために大きな机が室内を舞ひ回つたり、樂器が獨り手に音樂を奏したり、其外色々不思議のことをする事を試驗して居る。或學者は是は幽靈の活動であると眞面目に考へて居るが、左樣とも言はれるけれど、又其は其の試驗に使はれる人物共の一念の力であるとも解せられる。寫眞を取て見ると目に見えぬ幽靈が寫つて居ることが度々あつて、此れも幽靈のある證據とされ

て居るが、矢張或人がさういふ幽靈の姿を想像するので、其が寫眞にまざ〳〵と寫るのではないかとも思はれる。まあこんなことは分り難い事で、我等は之を兎や角言ふことは出來ぬが、何れにせよ人の物事を念ずる力といふものは恐るべく强いもので、大いなる影響を生ずるといふことは十分考へられる。

物を念ずるときには、自分は殆ど其物になつて仕舞ふ。基督は汝等の財の在る所に心もまた在ると仰せられたが、實際自分が尊び財として居るものゝ在る所に心はある。金を尊むで居れば金と共に心が上り下りするのである。若し其を多く得れば非常に喜び、若し全く失へばもはや自分は天下に存在の意味がないかのやうに感ずる。名譽とか地位とかを尊ぶとまた其等のものになつて仕舞ふ。特に人間を思ふて居ると、自分も其の人になつて仕舞ふ。母は我子の生れた時から自分が世話をする。まだ眞赤な時から、子が泣いたり顰むたりするのを見て、想像したり思ひやつたりする。それで段々經驗を積み、段々馴れて來